
異界の帝国

赤木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の帝国

【Nコード】

N7802M

【作者名】

赤木

【あらすじ】

太平洋戦争で辛くも勝利した大日本帝国。史実とは違う歴史を辿った帝国が異世界に転移する。
不定期更新です。

第一話（前書き）

短いですが投稿します。
駄文です

第一話

2010年5月10日 1300時 帝都東京

対米戦勝記念日の今日は陸軍による盛大なパレードが行われていた。近年の中東情勢を鑑み、アメリカに協力するかたちでイラクへ少なからぬ数の兵士を送り込んでいる日本。だがパレードはそんなことを気にするまでもなく行われていた。その光景を見ている二人の男がいた。「あれが新型戦車か・・・ちよつと小さく見えるな」一人の男が言った。「重量50tで防御力は90と同等以上とか」と傍らの男。「90より10t軽い・・・まあ国内の道路網は60t級の90に対応してるがな。それはそうと、イラクからの撤退が決まったらしい」「山根さん本当なのか?」「陸軍の知り合いから聞いたんだ。村田さん、あんたも気付いてるだろ?各地のPKOも在韓日本軍も撤退している。何か起きそうじゃないか?」「韓国の場合には独立が決まったからだろう」「村田さん、俺はそんなことよりもっと大変なことになると思うんだよ・・・まあ予感でしかないがな」「山根さんの予感には当たるから嫌だな」

1900時 首相官邸

山村総理はフランク米大統領と電話会談をしていた。「山村総理、やはり撤退させるのか?」「大統領、すまないが我が国も随分と世論に左右されるようになったのだよ」戦死者九百人、決して少なくない損害だ。山村は遠い中東の地で戦う兵士達に思いを馳せる。

太平洋戦争で消えた多くの人命に比べれば少ないかもしれない・・・だが今の日本は人命を重視しているのだ。少しの損害でも痛い。「大統領、もう決めたことなのだ。これ以上の損害は許容できない」

「そうか。残念だが合衆国だけでなんとかしよう」

数日後、イラクからの撤退が発表された。七千人の陸軍兵士は日本に帰還できることを喜んだ。大きな波乱に巻き込まれるとも知らずに。

第二話（前書き）

まだまだ短いです。転移後を書いています。

第二話

2014年3月25日 10時18分 東京

三年前、突如発生した時空の歪みに呑み込まれた日本。

その先にあつたのは新たな世界・・・馴れ親しんだ旧世界との断絶は、新たな出会いを生んだ。終わりだと思ったが・・・「この世界も捨てたもんじゃない」

山村は窓から見える東京を眺めながら呟いた。

新世界への転移は日本を衰退させると、当初は噂されていた。これまで輸入に頼っていた石油や食糧がなくなるのだ。まさに危機的状況であつたが、調査隊からの報告により事態は好転した。『小笠原諸島周辺の海底に石油を確認』現在の小笠原油田地帯である。そして、この世界に来て最初の国家との接触に成功する。

タリアニア・・・日本の西方約3000Kmに位置するカール大陸の南部にある国家だ。

カール大陸南部にはいくつかの国家が存在していたが、中部から北部にかけては広大な森林地帯と荒地が広がっており、国は存在せず人々は小さな村で生活している。山村はこの地域の開発権を獲得することに成功し、二年前に開発団と少数の陸軍部隊を送り込んだ。

「三年とは、こうも早いものなのか」

「総理、そろそろお時間です」秘書に声を掛けられ、山村は立ち上がった。

4月2日 12時37分

カール大陸中部 陸軍治安維持部隊本部

森林を切り開いて設営された本部では、本土より送り込まれてきた兵士への説明が行われていた。

「この二年間、大陸は平和だ。喜べ諸君！本土で訓練に明け暮れるより、こっちで自由奔放にやろっじゃないか！」部隊長である大尉が何か言っている。

今村正一 一等兵はそれを聞き流しながらも、内心で大尉を罵った
「何が自由奔放だよ。むさ苦しいぜ」

「こらあ！貴様あ、今何か言ったか？」

・・・まずい、聞かれたか「楽しみだと言いました！」

？「そうか。貴様、名乗ってみろ！」

「ハッ。第25師団より参りました、今村正一 一等兵であります
！」

「では今村一等兵に聞こう。なぜここに来た？」

「金貰えるからです！」

「やはりそうか！ここに居る奴らは皆そうだ。まあせいぜい頑張れ
や」

そう言う大尉は離れていった。

現在この部隊には百二十人が所属しており、六人一組の班を編成の
うえ、交代で警備にあたっている。

今村は北部を担当する班に配属された。

「北部ね、どこへでも行ってやるさ」

今村は兵舎の中へ消えていった。

第三話

5月1日 11時30分

バルアス共和国首都タレス

三十年前の統一戦争勝利を記念して建設された記念館。

かつてバルアス共和国は、強大な軍事力を周辺諸国へと侵攻させた。それを止めることのできる国家は存在せず、バルアス共和国はドリス大陸を僅か一年で征服する。

当時の共和国軍の活躍を後世まで語り継ぐために建てられたのが、この統一戦争記念館であった。

その門をくぐれば、記念館に至る通路の両側に功労軍人の銅像が立ち並び、来館者を出迎える。

その通路をゆつくりと進む一人の男がいた。

「この場所こそが我が共和国の中で最も誇れる場所であろう。」男の名は『ダレン・デイビス』バルアス共和国防衛大臣である。

ダレンはそのまま記念館内部へと入っていく・・・展示スペースを抜けた先に目的の場所はあった。

大会議室は既に満員の状態で、そのほとんどが共和国軍の制服を着ていた。

防衛大臣の入室により会議が始まる。

「本日集まってもらったのは、我が共和国より1200Kmを隔てたカール大陸周辺で確認された新たな勢力について、今後の対応策を協議するためだ。今から配る資料を見てほしい。」

資料が行き渡ったのを確認すると、ダレンは説明を始めた。

「まず一枚目の写真を見てくれ。これはカール大陸に潜入している工員から送られてきたものだ。見たこともない船だが・・・おそらく軍艦だろう。その近くには護衛と思われる小型艦が少数。これらの国籍不明艦がタリアニア近海に頻繁に出没するようになった。」

「平らな甲板で武装は機銃程度か。一体何に使う船なのだ？小型艦

も武装が貧弱に見える。我が海軍が誇るセレス級巡洋艦なら容易に撃沈できるだろう。大きな脅威にはならないと思うのだが。」写真を見ながら、ジャックス・ドレイク海軍中將が言う。

「ドレイク中將、確かにその通りかもしれないが、万全の体制で作戦を実施したい。周辺海域の警戒は怠るな。」

「この写真に写っているのは現地住民でしょうか?」「ここ最近力ー大陸北部で見かけるようになった謎の集団だ。武装したグループもいるようだ。数は少ない。これらは国籍不明艦とも関係があるとみられている。」

「大臣、実は未知の勢力について気になる情報があります。」

「君は陸軍情報部のレッグマン大佐だったな。どんな情報だ?」

「タリアニアにいる情報部員からの情報ですが、数ヶ月前からニホンという国についての情報が多く入ってくるようになりました。ニホンの位置や軍勢力等不明な点は多いですが、タリアニアの友好国であり、大陸に開発団を送り込んでいるということが分かっています。」

「なるほど、国籍不明艦はニホンの軍艦で、謎の集団は開発団か。」

「カール大陸侵攻作戦を実行するうえで、ニホンとは確実に衝突する。だが共和国軍の力をもってすればどんな国だろうと鎧袖一触、粉碎できるだろう。ニホンとやりにバルアスの力を思い知らせるのだ。この作戦は共和国の栄光の歴史に、新たな1ページとして刻まれることになる!」

ダレンの一言で会議室は拍手に包まれた。

15時10分 バルアス共和国首都タレス南地区 タレス軍管区司令部

共和国軍の創設期より軍事施設が集中し、首都防衛部隊の第一歩兵師団が駐屯するバルアス最大の基地にタレス軍管区司令部はあった。この司令部は、カール大陸侵攻作戦で陸海空の三軍統合司令部として使われることになっている。ここには数日前から、作戦に投入される部隊が集められていた。

ジャックス・ドレイク中将率いる第二艦隊もその一つである。巡洋艦四隻と駆逐艦八隻を擁するこの艦隊は、次の作戦では輸送船の護衛に投入される予定だ。

旗艦セレスは、セレス級巡洋艦の一番艦として建造され、共和国で初めてミサイルを装備する艦となった。その打撃力は計り知れないものがあり、まさに最強の海軍にふさわしい戦闘艦として国民から親しまれている。艦長のジダール・デレック大佐は一人艦橋に立ち尽くしていた。

今度の作戦はデレックにとっては初の実戦である。

「このセレスならどんな軍艦が相手でも怖くない。私は父と同じように、手柄をたてて共和国の英雄になる。」デレックは笑っていた。今後自分に訪れる運命に、この時点では気付くはずもなかった。

第四話（前書き）

帝国が色々とメチャクチャです・・・。
駄文失礼

第四話

6月7日 22時57分 カール大陸北部海岸

今にも吸い込まれそうな暗闇の中を、一つのボートが進んでいた。十人の人間を乗せたそのボートは、ゆっくりだが確実に海岸を目指して進む……

「まもなく海岸に到達する、装備の確認をせよ！」

一人の男が周りの男たちに指示を出すと、銃の確認を始める。

「よし！到着だ、あの茂みに移動する。静かに行け。」

男たちは姿勢を低くして移動を開始する……共和国陸軍第五偵察隊の十名は偵察と同時に、潜入している情報部員との接触が目的である。

何故接触する必要があったかというところ、情報部員から直接来てほしいと連絡があったからだ。

「例の情報部員とは昨日から音信不通みたいです。」「捕まったのでは？」

「とりあえず俺たちは任務に集中しよう。」

偵察隊は茂みからゆっくりと出ていく……この時彼らは、監視されていることに気付いていなかった。

「今村、お客さんが動きだした。」

暗視装置越しに近藤軍曹の指差す方向を見ると、不審な男たちが小走りに移動している。

「いた！」今村は直感的に銃を向ける……89式小銃に取り付けられたドットサイトで狙いを定める……

「まだ撃つな！隊長らしき人物を捕まえる。」

「よし……今だ！」

次の瞬間、辺りに89式小銃の射撃音が響き渡る。

共和国陸軍第五偵察隊長 トリアス・ローセン少尉は、突然の銃撃に驚愕する。

周りの部下たちは、正確な射撃の前に次々と倒されていく……

「くそっ」

トリアスは先程まで隠れていた茂みへ向かおうとするが、誰かに肩を叩かれ思わず振り返る……

そこには見たこともない兵士が立っていた。

「少し眠ってもらうぞ」

次の瞬間、トリアスの首に屈強な腕が巻き付く……

必死に抵抗を試みるも、締め付ける力は増していき、徐々に意識が薄れてくる……

「空挺なめんなよ」

そんな言葉を聞いた気がした。

トリアスはこの後、治安維持部隊本部へ連行され、取調べを受けることになる。

彼にとって不運だったこと……それは近藤軍曹が空挺レンジャーだったことだろう。

6月17日 広島県 呉

ここ呉は海軍の町として栄え、多くの軍艦を生み出してきた。戦艦『大和』……就役から七十年以上が経過した今でも、帝国海軍の象徴として君臨し続けている。

最大の特徴である46cm主砲、艦橋側面にはフェイズド・アレイ・レーダー、マストには衛星通信アンテナ等の各種電子装備が並ぶ。かつて装備されていた機銃や高角砲の姿はなく、速射砲と対空ミサイルやトマホーク、ハーブーン等の発射機が並んでいる。

この武装からも分かるとおり、アメリカの影響を大きく受けていることは言うまでもない。

現在、大和は出港に向けて準備を進めていた。

カール大陸より北に1200Km。そこには別の大陸が存在している。

その動きを監視していた偵察衛星が、大陸南部に戦力が集結しているのを捕捉したのだ。

監視を始めたきっかけは、カール大陸治安維持部隊が捕縛した二人の人間からの情報であった。

二人が話したバルアス共和国の存在と、カール大陸への侵攻計画は即座に本土へ知らされた。

総理大臣の山村は、帝国軍統合司令部にカール大陸防衛を指示する。

戦後の軍事改革により、陸海軍を統合運用する目的で帝国軍統合司令部が設置された。後に空軍も設立され、そこに加わっている。

司令部は国防大臣と陸海空軍の各軍より選出された司令部要員で構成され、作戦立案から軍の運用までを任されている。

また、戦後の日米同盟では兵器の取引が積極的に行われており、その過程で帝国空軍はアメリカの戦闘機を多数導入している。

それ以外では、ミサイルや軍艦の兵装システム等も積極的に導入された。

第二次世界大戦で、中国大陸からは早々に撤退。

南方の資源確保と対米戦に力を傾けた帝国は、マリアナ沖で行われた大規模な艦隊決戦で勝利した。

この勝利の後、帝国から停戦交渉をもちかけ、アメリカ側が応じることになる。もはや日本との戦争は意味がないとの判断からだった。交渉は有利に進み、南方の資源地帯と朝鮮半島（韓国）は帝国領として認められる。有利な条件での講和・・・帝国にとっては勝利と同じであり、講和条約が締結された日は戦勝記念日となった。

その後帝国はアメリカと同盟を結び、その関係を強固なものにしてきた。

話は戻る・・・

大和のCICは、艦橋直下の分厚い装甲に覆われた区画に存在する。この薄暗い空間を照らすのは、所狭しと並んだディスプレイと機器類が発する赤い光のみ・・・。

大和艦長 武田 政信大佐はこの空間が好きだった。

他の帝国海軍艦艇のそれよりも広いが、機器を詰め込み過ぎて逆に狭く感じる・・・

「この狭さがちょうどいいんじゃないか。」

「艦長は狭い場所が好きだとか？」

「ああそうだとも。この巨体の割にここは随分と狭いからな。」武田はCICの主と呼ばれる 高橋 健二少佐と妙な話題で盛り上がっていた。

「艦長、第二空母戦闘群司令部より通信です！出撃は明朝0700。以上です。」

第二空母戦闘群は航空戦隊と打撃戦隊で構成されており、この大和は打撃戦隊の指揮艦艇である。旧世界では世界最強のバトルグループとして、各国海軍に恐れられていた。

しかし何度も退役の話が持ち上がったのも事実だ。が、大和は今も現役であり、帝国海軍に居座り続けている。

「こりゃ全艦放送の一つでもしておくべきか。」

武田は艦内放送のマイクを掴む・・・

「あゝ、艦長の武田だ。明朝0700、我々は遂に出港する！カール大陸を狙う敵勢力に、この老兵の力を見せ付けてやろう。」

「いよいよ始まるのか。」

副長の 宮野 洋中佐は、自室で艦長の放送を聞いていた。

「総員、出撃に備えて準備をしておくように。以上！」

戦後の創設以来、数々の戦場に兵士を送り込んできた第一軍団は、今回も多数の兵士を送り出そうとしていた。

戦後数十年で帝国陸軍の編成は様変わりした。

第一軍団に属する第三師団は、先遣隊としていち早く大陸へ進出することになっている。また、90式戦車と新鋭の10式戦車を装備する第五機甲師団は、第二十五師団と共に大陸中部へ展開する予定だ。

カール大陸への派兵は継続的に行われ、最終的には八万人に達する予定である。

統合司令部陸軍部では、今も作戦会議を続けていた。

「要するに敵を大陸北部に上陸させ、中部の防衛線で叩くと。」

統合司令部陸軍司令官 矢沢 要一大将が作戦計画を見ながら言う。

第一軍団長の 住田 孝次中将は頷いた。

「よし、この作戦でいく。住田中将、現地軍の指揮は君に任せる。」

「しっかり働いてみせます。それではすぐ準備に取り掛かります。」

住田は敬礼をすると部屋から出ていった。

第五話

7月2日 10時00分

バルアス共和国首都タレス

大統領宮殿

共和国大統領 テルフェス・オルセンは出陣式で読み上げるスピーチを考えていた。

今日からカール大陸侵攻作戦が開始される。

陸軍第十五師団と海軍第二艦隊は準備を完了しており、出陣式終了後はカール大陸へ向けて出撃することになっている。

陸軍偵察隊と情報部員が行方不明であることは伝わっていたが、大統領の頭は作戦開始の喜びで満たされ、行方不明者の事など既に忘れていた。

「戦争は三十年ぶりか・・・建国から千年、我が共和国は一度も負けたことがない。東方の新興国などに負けるようなことはないだろう。」大統領はダレン・デビス防衛大臣に向かって自身ありげに呟いた。

「当然です大統領。この戦争は共和国の圧倒的勝利として歴史に刻まれるでしょう。」

「新兵器を使う機会がこんなにも早く訪れるとはな・・・ミサイルの威力を試すには絶好の相手だろう。」

「しかし第二艦隊は輸送船団の護衛に戦力を割いておりますが・・・

「護衛など必要なかろう。第二艦隊の任務は二ホン艦隊への攻撃だ。

「それでは最小限の護衛を残して、主力艦を二ホン艦隊へ向けることにしましょう。すぐにドレイク中将に伝達します。」

タレス軍港

巡洋艦セレス

ジャックス・ドレイク中将は艦橋の指揮官席に座り込み、何かを考えていた。・・・『カール大陸近海へいち早く進出し、二ホン艦隊を撃滅せよ』・・・

その命令が届いたのは一時間前のことだ。

最初からそのつもりだったかな

ドレイクは二ホンとの戦闘を楽しみにしていた。

「いざ出撃となると不安になるものだな。だが私はここへ戻ってこなければいかん。」

「ドレイク閣下、出陣式が始まります。我々も行きましょう。」

「うむ、行こうか。艦長、今回の作戦では空軍の支援を受けられない。陸軍上陸後に臨時の飛行場を設営するらしいが・・・それまで空軍の戦闘機は進出できないようだ。」

「私としましては、空軍の支援がなくとも作戦を完遂できると考えております。それに二ホンが戦闘機を持っているという情報はありませんので、心配には及ばないでしょう。」

「そうだといいいんだが・・・」

二人は出陣式の会場となる司令部前へと向かっていく。

7月2日 17時25分 タリアニア領海内

原子力空母飛龍・・・満載排水量10万トン超の巨艦は、タリアニア臨時軍港を出港したばかりであった。

艦載機の烈風は平成五年から調達が始まった、帝国海軍空母航空団の主力戦闘機だ。

飛龍航空隊の飛行隊長 松尾 和雄中佐は格納庫にいた。

「この戦い・・・お前の出番があるだろうか。」松尾は烈風の傍でくつろぎながら、これからの作戦について考えている。

「中佐殿、こんな所で何をされてるのですか？」

声を掛けてきたのは、最近この飛行隊に配属されたばかりの大尉だった。

「まあ色々と考えていたところだ。」

「こいつはいい戦闘機ですよ。」

その大尉は烈風を見上げながら呟く。

烈風は可変エアインテークを持ち、外観的には空軍のF-15に近いものがある。

開発の段階でF-15を参考にしたと噂されており、それは事実だった。

主翼を折り畳まれた状態ではあるが、それを広げれば頼もしく堂々とした姿に変貌することは容易に想像できた。その逞しい外観と卓越した機動性で、ロシアの領空侵犯機から恐れられ、アメリカからスパーゼロと呼ばれ畏怖の対象となっている。

「河野大尉だったな？俺の部下になったからには、しっかりやつてもらうぞ。」

「全力を尽くします！」

艦隊は哨戒海域へ向けて航海を続ける・・・そしてバルアス艦隊もまた、決戦の場を求めて突き進んでいた。

7月3日 カール大陸中部地区

草原地帯が広がるこの場所に陸軍の大陸派遣軍司令部があった。

現在も戦力の集積が続いており、その中には10式戦車の姿もある。

大陸派遣軍司令官の住田 孝次中將はその光景を眺めていた。

「それにしても・・・よくこんなに早く展開できたもんだ。海軍さ

んの輸送力は伊達じゃないな。」

「今後さらに増強される予定であります。」

「まだ増えるのか。とりあえず今は防衛線の構築を急がせろ。敵は待ってくれんぞ。」

住田は部下にそう命じた。

上空を中島飛行機製攻撃ヘリ、隼の三機編隊が航過する。

「敵さんも驚くだろうな。まさか我々が待ち受けているとは予想すらしてないだろう。」

第六話（前書き）

戦闘描写が何か・・・あまり気にしないでください！

第六話

7月13日 19時30分

カール大陸西方海上

バルアス共和国第二艦隊は二ホン艦隊を探し、南下を続けていた。

この海域に進出して数日・・・搭載するレーダーは未だに敵を捕捉できていない。

駆逐艦四隻を輸送船の護衛に割いているが、それでも巡洋艦四隻と駆逐艦四隻を擁しており、二ホン海軍に対抗するには十分な戦力であると判断されていた。

巡洋艦四隻は全てセレス級であり、新兵器のミサイルは多大な戦果をもたらすと信じられている。

「まだ二ホンの船を発見出来ないのか？
まさか逃げたんじゃないだろうな。」

「このセレスを見れば逃げ出すかもしれないぜ！」

艦橋の見張り所では二人の若い水兵が、見張りもそこに話し込んでいた。

「おい！真面目に見張ってるか？」

「今のところ異常ありません！艦長、このままで二ホン艦隊を発見

出来るのでしょうか？」

「すぐに発見できるさ。その時はこのセレスのミサイルで叩き沈めてやろう。」

私は戻る、しっかり見張れよ。」

艦長のジダール・デレック大佐が艦橋に戻ろうとしたとき、嬉しい報告が舞い込んできた。

艦橋でレーダー画面を監視していたレーダー員が、不審な影を見つけたのだ。

「敵艦隊発見！距離80。」

「遂に来たか！艦長、総員戦闘配置につかせる！」

第二艦隊司令官のドレイク中將は艦長に命令する。

「はっ！ミサイル戦用意・・・！」

第二艦隊の各艦は戦闘準備を整えていく・・・

「ミサイル発射用意完了しました。すぐに発射できます！」

「よしっ、各艦ミサイルを発射せよ。」

ドレイク中將の命令は無線を通じて各艦に伝わり、巡洋艦の前甲板にあるランチャーから、二ホン艦隊へ向けて必殺のミサイルが発射された・・・。

カール大陸西方海上

帝国海軍打撃戦隊は、バルアス艦隊よりも早く敵を捕捉していた。

「敵艦隊、方位3 1 5、距離85、速力20ノットで南下中。」

「引き続き対空、対水上見張りを厳となせ！油断するなよ。」

大和艦長の武田大佐はCICのディスプレイに映し出されたバルアス艦隊を見ていた。

打撃戦隊各艦は戦闘態勢に移ろうとしている。

この打撃戦隊を構成するのは戦艦大和以下、巡洋艦 金剛、高雄、妙高。駆逐艦 島風、浦風、村雨の七隻だ。巡洋艦は高度な防空システムを備えており、その他の艦も個艦防御には十分な装備を持っている。

「敵大型艦より高速目標分離、ミサイルが発射された模様！」

「金剛、高雄、SM 2発射………目標六発撃墜！残り二発、高速で本艦に近づく。」

「対空戦闘用意！」

「対空戦闘、シースパロー攻撃はじめ！」

「シースパロー発射用意よし！」

「シースパロー発射はじめ！」

大和が発射した二発のシースパローが目標へ向かって飛翔する。

「インターセプト五秒前、……マークインターセプト!」

艦隊からかなり離れた上空に爆発炎が煌めく……。

「目標全弾撃墜!」

「そろそろ反撃といこうか。……対水上戦闘用意!」

その頃バルアス艦隊司令、ジャックス・ドレイク中将は何が起こったか把握できていなかった。

「全弾迎撃されただど!?!」

「そうとしか考えられません。敵がどんな手段を使ったのか分かりませんが……」

「我々ですらミサイルに対する迎撃手段を持っておらんのだぞ……!」

「司令、ここは砲撃戦に持ち込みましょう! 共和国海軍伝統の砲撃戦に持ち込めば敵は逃げ出すでしょう!」

「艦長、君は砲撃戦を知らない。まあ二ホン海軍には勝てると思うが……」

「何か……?」

「我が海軍は砲撃戦で常に無敵だったわけじゃない。三十年前の統

一戦争で、とある海岸砲に出くわしてな・・・そいつは30cm砲、海軍のどの軍艦よりも大きい砲だった。

何隻沈められただろうか・・・あの砲弾の飛翔音と巨大な水柱は今も覚えている。戦後しばらくは毎晩夢に出てきたもんだ。」

「司令はあの戦争に？」

「新米少尉として巡洋艦に乗り込んでいた。」

大和CIC

「水上戦闘、ハーブーン攻撃はじめ。目標、敵小型艦。発射弾数二つ。」

「目標、敵小型艦。発射弾数二つ。目標位置39度31分ノース、93度36分イースト。」

「ハーブーン発射用意よし！」

「ハーブーン発射はじめ！」

「一番発射用意・・・撃て！」

ハーブーンの弾体がロケットブースターによって持ち上げられる・・・程なくしてブースターを分離したそれは、ジェットエンジンの推力により目標へ向けて低空で突き進んでいく。

バルアス艦隊

駆逐艦口レリア

「艦長、旗艦より入電！駆逐艦隊は二ホン艦隊へ肉薄、魚雷戦で撃破せよ！以上。」

「やっと我々の出番か。最大戦速！二ホン艦隊の横腹に魚雷をぶちこんでやるぞ！」

「艦長！前方から高速飛翔体接近中！」

「何っ！？」

駆逐艦ロレリアの艦橋から前方を凝視する・・・それは急に上昇へ転じ、上空で突入態勢に移行した・・・
艦長はそれがミサイルであることに漸く気付くが、既に遅かった。

巡洋艦セレス艦橋

「駆逐艦ロレリア爆発しました！ああ・・・沈みます！」

「なんだと！？」

艦長のデレック大佐がその方向を見ると、駆逐艦の小さな艦体の大半が海面に没しているのが分かった。

ロレリアだけではなかった。他の駆逐艦も松明のように燃え盛り、駆逐艦隊が瞬時にして戦闘不能に陥ったことを示していた。

「司令・・・駆逐艦隊がやられました。撃沈を免れた艦もいるようですが、もはや戦闘行動は不可能でしょう。」

「二ホンの攻撃か・・・奴らもミサイルを持っていたのだな。もはや全艦突撃して砲撃戦を挑むしかないか。」

「砲撃戦で叩き潰してやりましょう!」

「今回は海岸砲が相手ではないからな、思う存分撃ちまくれる! 砲撃戦に持ち込むぞ! 最大戦速。」

バルアス艦隊の巡洋艦四隻は、砲撃戦を挑むため速力を上げはじめた。

大和CIC

「艦長、敵大型艦四増速、攻撃しますか?」

「いや、奴らは砲戦を仕掛けてくるぞ。ここは受けてやろうじゃないか。」

艦長の武田大佐は、バルアス艦隊の意志が伝わってきたような感覚になっていた。

「砲術長、相手は四隻だ。この大和一隻で勝負できるか?」

武田は砲術長の高橋 健二少佐に問い掛ける。

「十分に可能です。最新のレーダーと砲撃支援システムを使えば精度の高い砲撃が可能です。」
「さすがに初弾命中は無理だと思いますが。」

「よし、では金剛以下六隻は万が一に備え待機。この大和だけで迎え撃つぞ！」

バルアス艦隊
巡洋艦セレス

「ニホン艦隊、六隻を切り離れた模様！一隻がこちらへ向かってきます！」

「一隻とは、我々も舐められたものですね。司令はどう思われますか？」

「艦長、これで遠慮なく叩けるのだ。嬉しいかぎりじゃないか。」

ジャックス・ドレイク中將はそう言ってみたものの、嫌な予感を感じていた。

この感覚・・・まるであの時の海岸砲を相手にした時の・・・

「・・・司令！どうかされたのですか？」

「いや、少し考え事だ。相手は一隻だが油断するな、徹底的にやるぞ。」

「はっ！」

接触までまだ時間がある。この時点ではバルアス艦隊の誰も、とん

でもない怪物を相手にするとは気付いていない。
ジャックス・ドレイク中将だけが薄々何かを感じていた。

第七話（前書き）

非現実的な描写もあるかと思いますが…

第七話

7月13日

カール大陸西方海上

戦艦大和

「敵艦隊、まもなく主砲の射程内に入ります。」

「面舵、方位0 8 5」

大和の艦首がゆっくりと回頭を始める。

完全に回頭が終わったとき、砲術長が新たな指示を出す。

「左砲戦用意。」

三基の巨大な主砲塔が左へ旋回し、射撃の時を待つ…

この大和に搭載された砲撃支援システムは、大和のためだけに開発されたシステムである。

レーダーと連動したそれは、距離や速力を計算に入れたうえで、敵艦の未来位置を即座に算出することができるのだ。

この装置が搭載され、光学測距は訓練時のみ行われている。

「システムオンライン、敵艦との距離四万五千。」

バルアス艦隊

旗艦セレス

「敵大型艦、変針しました。」

「ニホンの大型艦といえば軽武装で平らな甲板をもったやつか…」

「もしかして例の写真に写ってたあれですか？」

「ああ。大型艦の目撃情報はそれだけだ。そして軽武装……しかし我々は駆逐艦を撃沈され、相手にはまだ何の痛手も与えていない。」

「司令、ご心配なく。近接戦闘重視の我が海軍が負けるはずありません。それにセレス級巡洋艦は砲撃戦にも十分対応できるかと。」

「艦長、我が海軍の巡洋艦は伝統的に8インチ砲を搭載してきた。このセレスは長砲身8インチ砲だ。この艦の力を存分に発揮してあの大型艦を沈めてやろう。といつても射程内までまだ距離があるな。」

「ニホンの軍艦にもミサイルが装備されていますが、砲撃力は低いものと思われます。あっても機関砲程度でしょう。」

「私の予想ではもう少し大きい砲を……この音は!？」

どこからか砲弾の飛翔音が聞こえる。それも大口径砲弾の飛翔音である。

少しして左舷約500mに着弾し、三つつの巨大な水柱を生み出す。

「なっ…あれは! なんとという大きさだ!」

「艦長、どうやら我々とはんでもない化け物を相手にしているようだ。こちらの射程外から撃ってきた…それにかんりの巨砲だ。当たったらまずいぞ!」

「あんなもの見たことありません…一体どれほどの砲でしょうか…」

「間違いなく30cmオーバー、今まで見た中で一番巨大なやつだ。こちらが射程距離に近づくまでは一方的に攻撃される。」

再び聞こえてくる飛翔音…「まずい、これはかなり近いぞ…！」

数秒後、それは右舷50mあたりに着弾し、セレスを木の葉のように大きく揺さ振る。

今まで経験したこともない動揺…その衝撃によって、艦内のあらゆるものが倒れ伏す。

ドレイク中将もまた、立っているのが精一杯であった。

「化け物め！ 艦長！ 速力を上げろ！」

「了解！ 速力30！」

「また来るぞー！ 衝撃に備えろ！」

そう叫んだドレイクは艦橋の外に目を向ける…

外を見ると赤熱した砲弾が、自分に突っ込んでくるかと思うほど近くに迫っていた…

「うおっ！」

思わず伏せた瞬間、巨大な砲弾は艦橋右舷を掠めた後、海面に突入する。

「海中で爆発する！ 衝撃に備え…」

艦長が言い終わるよりも早く海中で炸裂した46cm砲弾は、セレスの推進軸四本の内二本を曲げてしまう。

そしてその衝撃は艦後部を数十cm浮き上がらせ、セレスの艦体各所から悲鳴のような軋みが響き渡る。だがセレスは辛うじて耐えてみせた。

「ちょっと浮いたぞ！ 大丈夫なのか！？」

「なんて衝撃だ…当たったら間違いなく沈没だ…」

「被害を報告せよ。」

「推進軸がやられたようです！ 速力低下！」

戦艦大和CIC

何度目かの主砲射撃によって僅かに震動が伝わってくる。

今のところ命中弾はないが、至近弾によって敵艦になんらかのダメージを与えたことは確実であった。

「一斉撃ち方」

「一斉撃ち方了解！」

CICに設けられた射撃指揮所……そこに設置された大型ディスプレイには、敵艦の現在の位置と未来位置が表示されていた。

その位置情報はすぐに主砲に送信され、射撃に向けて微調整をする。

調整はすぐに終わり、九門の46cm砲は斉射の時を待つ…

「撃て！」

直後、交互撃ち方の震動よりも遥かに大きな震動が伝わってきた…
発砲炎は、真昼のような明るさで大和を闇の中に浮かび上がらせ、
待機していた艦隊からも確認できた。

巡洋艦セレス 艦橋

ドレイク中将は自分が冷や汗を流しているのに気付いた。

「なんということだ…この私が恐怖しているとでもいうのか！」

その時、再び砲弾の飛翔音が聞こえてくる…

「数が多い…」

ドレイクは咄嗟に近くの物陰に身を隠す。

デレック大佐には主砲塔に命中する砲弾が見えていた…目の前の光景がスローモーションのようにゆっくりと流れていく…

その砲弾は砲塔上面を易々とぶち抜いてしまった。

主砲弾薬庫に突入したそれは、セレスに致命的な破壊をもたらす…

弾薬庫の誘爆だ。

デレック大佐は目の前が真っ白になり、意識が薄れていく感じがした…そして完全に意識を手放す。

弾薬庫の誘爆により艦橋前面が吹き飛び、艦長以下複数の乗員が死傷したが、破壊はそれだけではなかった。

誘爆の衝撃はセレスのキールをへし折り、艦体が真っ二つに引き裂かれた。

「神よ…」

運良く海に投げ出されたドレイク中将は、目の前に広がる破壊の光景に見入っていた。

新鋭の大型巡洋艦は、満足に反撃することもできずに海中に没してしまう。

敵艦は目標を後続の味方艦に移したようで、砲弾がこちらに降ってくることはなかった。

「まさかこうなるとは予想できなかった…」

ドレイクは近くに浮いてた木片にしがみつく。

「ニホン…お前たちはどこから来たのだ…共和国を 我が祖国を呑み込むつもりか？」

海上を漂いながら一人言葉を発するドレイクは、味方艦の轟沈する様を目撃する。

「あれでは生存者はいないだろう。」

その時、救命ボートが近くを通る…

「閣下！こちらへ！」

「すまん、助かった。」

「酷くやられたもんだな。味方の救援も望めない…少し休む。何かあったら起こしてくれ。」

そう言うどドレイクは眠りについた。

戦艦大和CIC

「敵艦隊撃滅、周辺に脅威なし。」

「これより敵兵の救助に向かう。」

大和は敵生存者が漂流している海域へ艦首を向ける。

7月13日深夜

バルアス共和国

首都タレス

タレス空軍基地

深夜にもかかわらず基地は騒がしかった。

少し前、タレス防空司令部が国籍不明機を捕捉したのだ。

戦闘機が緊急発進のために滑走路へ進み出る。

既に上空にある内の一機、カルロス・デラーク少佐機は、問題の空域へ向かおうとしていた。

「…防 ザッ…隊各機 ザー…南西の方角より…ザザッ…国籍…機侵入」

「畜生！ 無線機くらいもつといいもん載せてくれってんだ！」

そう言いながら南西に愛機の機首を向ける…バルアス空軍主力戦闘機のTA 87は、タレスアームズ航空機部門が開発した空軍向け戦闘機である。

就役から二十年が経過しているが、改良を続けながら今でも十分な性能を維持している。

一つ問題なのは、無線機の性能の低さだ。

空軍では無線機の開発が遅れており、未だに満足な性能の無線機を搭載していない。

海軍からミサイル等と合わせて導入しようという動きがあったが、戦闘機に搭載するにはあまりにも大きすぎた。

TA 87は主翼下に二基のジェットエンジンを吊り下げ式で配置し、武装は機首に30mm機関砲を四門装備している。

その重武装はあらゆる戦闘機を凌駕できると信じられており、デラーク少佐もその一人であった。

「本当に国籍不明機なんているのか？俺からしてみりゃいつもの平和な空そのものだな。まあ見つけたら蜂の巣にしてやるさ。」

バルアス共和国
首都タレス近郊

河野 達也大尉の烈風は、敵国首都にある軍事施設偵察のために単機でここまで進出していた。

「295より敵機が接近中、接触は避ける。」

「了解！」

データリンクによって、コックピットのレーダー画面にその機影が映し出される。

「さっさと終わらせて帰るとするか。」

河野はアフターバーナーを使用する…急激に加速する機体…

「カメラ起動。」

機体下部に設置された高性能カメラが起動し、その瞬間から撮影が始まる。

僅かな時間ではあったが確実に軍事施設の撮影が行われた。

「こちらオオワシ、偵察終了。これより帰投する。」

首都上空

カルロス・デラーク少佐は驚愕に身を震わせていた。

今まで見たこともない速さで飛行する物体：追跡に移ろうとしたとき、それは既に手の届かない遙か高空へと駆け上がっていた。

第七話（後書き）

日本とバルアス共和国の間には、埋めること出来ない差があります。

第八話

7月13日 9時30分

カール大陸北部

ゲロビーチ

海軍戦闘部隊が二ホン艦隊撃滅へ向かった頃、攻略部隊は上陸作戦を開始していた。

多数の上陸用舟艇が海岸線を目指して突き進んでいく……

ソート・サンダー一等兵は、兵士が肩寄せあう狭い舟艇の中で上陸地点に到達するのを待っていた。

「おい若いの！ まさかびびってんのか？」

古参の軍曹に尻を叩かれ横を見る。

「演習で何度もやったはずなのに不安なんです……前の扉が開いた瞬間攻撃されるんじゃないかと……」

「心配するな！ あそこには二ホン軍はいない！」

「上陸まで三十秒！」

「いよいよだな、上陸したらとにかく走れ！ 遮蔽物を探して身を隠せ。身を隠す場所がなければ伏せるんだ！ いいな！？」

「りょ……了解！」

そして上陸の時がきた……舟艇前面の渡し板が降ろされ、海面を叩いたそれは盛大な水しぶきをあげる。

「走れ走れ！」

膝の辺りまで水に浸かりそうな場所ではあったが、必死に走った……死ぬかもしれないという恐怖の中では不思議と疲れを感じない……

気付いたときには森林の手前にたどり着いていた。戦車揚陸艦から上陸を果たしたトールレス戦車が、速度を上げて森林地帯へと突入していく……

輸送船の甲板から作戦を見守る屈強な体躯の男が立っていた。その男、ロザエル・トセル少将は第十五師団長であり、今回の侵攻作戦の指揮官である。身長190cm、多くの皺が刻まれた顔はまるで伝説に出てくる鬼のようであり、上層部からもその容姿と性格から一目置かれる存在となっている。

「閣下、上陸作戦は成功です。どうやらこの辺りに二ホン軍はいないようですね」

「怯えて逃げたのだろう。我々も上陸するぞ」

部下の前でトセル少将はその皺くちなな顔に、寧猛な笑みを浮かべながら言う。

「あの日以来だ……」

「どうされましたか？」

「久しぶりの戦場……私の居場所はここでないかん。」

「閣下、じきにこの大陸は共和国の領土になります。我々がその先鋒として送り込まれたのは嬉しい限りですな。この大陸に住んでいる住民の権利、財産は我々の手に……」

「現地住民に対する暴力、略奪行為は厳罰に処す。なんなら貴様を本土に送り返してもいいのだぞ？」

トセル少将に睨み付けられた部下は、鋭い眼光に圧され黙ってしまふ。

「いかなる時も共和国軍人としての誇りを忘れてはならん。たとえそれが弱小国相手の戦争であつてもな。」

ロザエル・トセル少将は力強い口調で言い放つ……

こうして約一万七千人の攻略部隊がカール大陸北部に上陸、進軍を開始しようとしていた。

7月14日 3時40分

カール大陸西方海上

暗闇と濃霧が支配する静かな海上でジャックス・ドレイク中將は目を覚ました。

「まだこんな時間か……」 周りを見渡すが狭いボートの上で起きてるものは誰もいない。

「完敗だな。本国に何と言いつけるべきか……」

ドレイク中將はうるさい軍上層部の連中に対して、良い印象は持っていないかった。今回の敗北で更迭されるのは目に見えており、そのことを考えると帰りたくないと思ってしまう。「私もそろそろ身を退くか……」

三十五年もの間海軍に身を置き、統一戦争に従軍した経験を持つドレイク中將は疲れ切っていた。

「だがそんなことより……今は救助が来るのを待つしかないか」

そう言つて目を閉じたドレイク中將の耳に、どこからか波切り音が聞こえてきた。

「この音、まさか救助が来たのか？ こんなに早く来るとは」

ちょうどその時、辺りに立ちこめていた霧が徐々に晴れてきた。

そして月明かりの下に一隻の船の姿が浮かび上がる 輸送船？ それにしては大きいが そこで決定的な違いに気付いたドレイ

ク中將は言葉を失う。

共和国海軍の艦船は白く塗装されているが、その船は白いどころか逆に暗い色であった。

その船は暗闇に溶け込み、その大きさや形状を把握することができなかったが、近づくにつれその威容が明らかになっていく……

「あれは!？」

ドレイク中将の目に飛び込んできたのは、こちらへゆっくりと近づいてくる巨大な軍艦の姿であった。

巨大な船体、巨大な主砲、城郭のように高くそびえ立つ艦橋構造物……その全てが規格外である。

「なんとという大きさ! あれがニホンの軍艦なのか……まるで要塞ではないか!」

ドレイク中将は今まで見たこともない巨艦の登場に鳥肌が立っていた。それはまさに洋上に浮かぶ鋼鉄の城そのものである。

巨艦はこちらの存在に気付いたのか、速度を落とすはじめる……そして完全に停止した。

「一体何をするつもりなのだ?」

その巨艦はサーチライトを点灯し、生存者たちを照らしだす。あまりの眩しさに、それまで寝ていた者も目を覚ましていく。

「まさか撃ってくるんじゃないだろうな……」

ドレイク中将は不安に駆られたが、それは杞憂に終わった。先程からしきりに明滅を繰り返す光が、発光信号と気付くのに時間はかからなかった。どういった意味かは分からなかったが、攻撃してくる気配はない。

「何か白いものを振るんだ」

近くにいた水兵が白い布を取り出し、巨艦に向かって振る……

「君たちはよく戦った。降伏するのはいささか不本意かと思うが、あの巨艦を前にしたら戦意喪失してしまったよ。ニホン人も同じ人間、命まではとらないだろう」

ドレイク中将の言葉に水兵たちは静かに耳を傾けていた。

「さあ、彼らの元へ行こう」

黙って話を聞いていた水兵たちは、静かにボートを漕ぎはじめる

……

漸く巨艦に接近を果たした時、その巨大さに改めて圧倒される。

「化け物だ……」

どこからともなくそんな声が聞こえてきた。

巨艦の舷側には階段らしきものが降ろされており、近くでは武装した乗組員が警戒にあたっている。その中の一人が声をかけてきた。

「一人ずつ上がってくるんだ」

「よし、私が先に上がる。後に続け」 ドレイク中将は階段をゆっくりと上がりはじめる。

戦艦大和の副長、宮野 洋中佐はその光景を近くから眺めていた。

「客人の登場だな」

そう言う宮野は、白髪頭のバルアス人の前に進み出る。

「ようこそ大和へ」

第九話（前書き）

遅くなりました。

第九話

聞いたことはないが、どこか勇壮に聞こえる行進曲が流れている……大統領宮殿に続く幅の広い道の両脇では、朝日を模したと思われる旗を持ったバルアス国民が暗い顔をして立っていた。

その道を見たこともない兵士の一団が、膝を上げ、腕を振り堂々と行進していく……見事な分列行進である。

「あれが二ホン兵！」

バルアス共和国の政治家たちは、その光景に息を呑む。自国の兵士よりも恵まれた体格の二ホン兵は、平均身長177cm。

屈強な体を覆う無駄にけばけばしく見える戦闘服は、タレスの街並に恐ろしいほど溶け込んでいる。

彼らは遠い異国の地からやってきた占領軍……そう、我々は多大な犠牲を払ったにもかかわらず、二ホンを退けることができなかったのだ。

それは共和国一千年の歴史で唯一の敗北。私は共和国大統領としてその全ての責任を負わなければならない……

「大統領、トーキョーで会議が開かれるようです……」

「ああ」

大統領……大統領！

「うつ……！」

テルフェス・オルセン大統領は、誰かの呼び掛けで唐突に目を覚ます。どうやら執務室で寝てしまったらしい。

「大統領、随分とうなされていたようですが？」 前を見ると、ダレン・ディビス防衛大臣が怪訝な表情を浮かべていた。

「悪夢だ……見知らぬ兵士、昇る朝日を模した旗、トーキョー……
一体なんだというのだ!？」

「どんな夢を見たのですか？」

「見知らぬ兵士たちが、タレスの街を我が物顔で行進しておった。
しかし……トーキョーとはなんだ？」

「聞いたことがありますね。情報部がタリアニアの本屋に立ち寄
った際に、ニホンを紹介する本があったようです。それによると、
ニホンの首都……いや、帝都だとか」

「帝都？」

「ええ。正式な国名は、ダイニッポン帝国というらしいです。ま
さかこの世に帝国なんてものが存在するとは思いませんでしたよ」

「十年前の調査ではそんな国は存在していなかった」

「突如出現した……そうとは思えませんな」

「大臣、他に情報は入ってきているか？」

「なんでも陸軍の総兵力は百三十万人らしいです。私は誇張して
るとしか思えないですね。そんなに軍人がいたら大半は使えないで
しょう」

「そうかもしれんが……それが本当なら我が軍の約三倍の兵力を
有していることになる」

「それほどの兵を維持できるはずがありません。我々を間接的に

欺いているのです」

「ここで決め付けるのはよくない。今後も情報収集に努めるように」

「はっ」

カール大陸中部
帝国陸軍司令部

ここは防衛線からだいぶ離れてはいるが、静けさとは無縁であった。

ほんの数時間前、本土から増強の二個師団が到着したのだ。これで大陸には十万人の兵力が展開することになる。

「これはいくらなんでも過剰じゃないか？」

大陸派遣軍司令官の住田中将は、呆れながらも頼もしく感じていた。

「ここに大規模な駐屯地でも設営するんでしょう。帝国陸軍カール大陸駐屯軍なるものができるかもしれないな」

「だがこんなところに大軍を置いてもな……」

「海軍も横須賀の第一空母戦闘群を投入するらしいです。あの赤城と加賀が来るというわけですね」

「空母を三隻も集めて何をする気なんだ？」

「敵国を空襲するんじゃないでしょうか」

「なるほどな。そうなるといずれは侵攻するということか」

「侵攻ですか……聞こえは良くないですが、バルアス共和国に日章旗が翻る日が来るのですね」

「ああ、バルアスがそれまでに降伏してくればいいがな」

「海軍さんは敵艦隊に大打撃を与えたみたいですが……我々には敵の侵攻を食い止める重要な任務があります。帝国陸軍の強さを見せ付けてやりましょう」

「そうだな。北部に上陸した敵兵力は一個師団規模らしい。増強の二個師団を早速防衛線右翼に配置する。これで敵を包囲殲滅するというわけだ」

「敵を包囲するのは四個歩兵師団と一個機甲師団ですか……なんというか敵が気の毒になってきましたよ」

「総兵力十万人、戦車百五十輜……バルアス軍を歓迎するには最適じゃないか？ 私は徹底した戦闘をするつもりだ。だが捕虜は丁寧に迎える」

「そうですね。とにかくこの戦争は犠牲を出さずに終わらせたいものです」

7月14日

札幌市内

新聞記者の山根 浩は自宅へ向けて愛車を走らせていた。ラジオからはプロ野球の実況が流れている。

『本日は甲子園球場から、阪神タイガース対国鉄スワローズ、首位決戦の模様をお伝えします……』

「まだまだ優勝争いは早いんじゃないか？ あと何試合残ってたけな……」

そう言いながら車を走らせていると、放送が突如途切れる……

「なんだ、故障か？」

『……緊急ニュースをお伝えします。7月13日、帝国海軍はバルアス共和国軍と戦闘状態に入れり。繰り返します、7月13日、帝国海軍はバルアス共和国軍と戦闘状態に入れり。なお、帝国海軍はバルアス艦隊を撃滅した模様……』

「遂に始まったか。こりゃ大陸へ行くことになりそうだな」

バルアス共和国

首都タレス

タレス空軍基地

カルロス・デラーク少佐は国籍不明機について報告をしていた。

「カルロス・デラーク少佐、いくら君の目が良いといっても私は信じられないな。音速を遥かに超える速度？ そんな速度で飛行したら機体はバラバラだ」

基地司令ジョン・マロー大佐はカルロス・デラークの報告を信じようとはしなかった。

「しかし……私はたしかに見たのです！ あれは間違いなく航空機、私の目に狂いはありません」

「少佐、音速を超えられるのは実験用に作られたミサイルだ。人間が乗れば肉体が耐えられない。まして戦闘機ほどの大きさの物体が音速で飛行すれば分解するのは確実だ」

「ですが！」

「君は疲れているんだ。少し休みたまえ」

「では失礼します」

カルロス・デラークはそう言うのと足早に部屋を出ていく。

あの能無しめ、自分で確かめてからものを言え！

心の中で上官を罵るが気分は晴れない。

「畜生！」

近くにあったゴミ箱を蹴りあげる……ゴミ箱の中身が飛び出し、廊下に散乱する。

「くそつたれ、今日は寝るか。今度不明機が来たら、あの能無し野郎を括り付けて飛んでやるぜ」

第十話

7月15日

カール大陸北部

バルアス陸軍大陸侵攻軍司令部

「海軍の戦闘部隊と通信が繋がらないだとな？」

司令官のロザエル・トセル少将は、部下であるバリー・ロレイス大佐からの報告を聞いていた。

「最悪の場合が考えられます。本国へ伝えるべきかと」

「うむ、タレスの司令部へ至急連絡しろ。海軍がやられたとは思いたくないが」

「はっ」

「こちらの作戦は順調か？」

「現在、四十五連隊を基幹とする部隊がこの地点まで進出しています」

バリーは戦略地図を見ながら説明する。

「ここには四十六・四十七連隊、戦車部隊はここです」

「どうやら進軍は順調のようだな。しかし戦力が足りん」

「本国からの増援は一週間後です。海を渡るのがこれほど大変だ

とは思いませんでしたよ」

「陸続きの場所で戦争をするのとはわけが違う。海という大きな壁があるからな。だがそれはニホンも同じ……大軍を短期間で配備するのは無理だ」

「私も同感です」

「ニホン軍がどれほどの兵力で待ち受けているか分からないが、我々と同等かそれ以下だろう。情報部の言うことが正しければだが」

「ですが情報部員は作戦開始前に撤退しています。ニホン軍が戦力を増強している可能性もあるのでは？」

「たしかにな……我々には戦車もある。新型のトールレス2型だから心配はないだろう」

「ええ。1型の75mm戦車砲より高威力の90mm戦車砲を搭載していますからね」

「ニホン軍は戦車を持っているのか？ 情報部はないと言っているが」

「おそらく持っているでしょう。ですがトールレス戦車の性能には勝てないかと」

ゲロビーチより内陸三十Km地点

四十五連隊に属するソート・サンダー一等兵は、分隊の仲間と南

へ向けて進んでいた。彼らは偵察任務も兼ねており、本隊からは数km先行している。

「なあ？　こんなところに本当に二ホン軍がいるのか？」

「それを見つけるのが俺たちの任務だろ」

「こんなところにいるとは思えんがな。サンダー一等兵、お前はど
う思う？」

「これほどの密林なら、隠れるにはちょうど良いかと思います」

「隠れる？　そんな子供騙しが俺たちに通用するはずないさ。お
ーい、二ホン兵ども！　隠れてないで出てこい！」

兵長が叫ぶが、密林は相変わらずの静けさをもって応じる。

「ほらな、やっぱり隠れてないだろ？　まあいたとしても俺たち
にはトールレス戦車がついてる」

彼らは二輦のトールレス戦車と共に行動していた。

トールレス戦車は従来型の戦車より車高を抑えられ、丸みを帯びた
砲塔を持つ。そして搭載砲の大口径化に伴い、車体もより大型のも
のになっている。

「さすがにでかいな……30トンはあるだろうか」

「今までのやつとは違うな。あの主砲を見たら二ホン軍など逃げ
ていくに違いない」

雑談をしながら進む一行は、しばらく歩き続けた後、開けた場所に出る。

「どうやら森を抜けたようだな」

その時、サンダー一等兵は自分の目線の先に黒い何かを見た気がした。

「あれは？」

「サンダー一等兵、何か見つけたか？」

「あそこに……」

サンダー一等兵が答えるよりも早く、それは彼らの分隊の前に躍り出る……黒い何かの正体は、見たこともない巨大な戦車だった。

「なんだあれは!？」

その戦車はゆっくりとこちらへ近づいてくる。

「あのでかいやつは二ホン軍の戦車だ! やつを撃て!」

一輛のトーレス戦車が敵戦車へ照準を合わせる……ドンッ……

トーレス戦車が放った初弾は砲塔正面に見事に命中し、敵戦車は爆炎に包まれる。

「初弾命中とはやるじゃねえか! ざまあみやがれ!」

「なっ……なんでだ……当たったはずだろ……？」

「どうしたんだ？……何っ！？」

砲弾が命中したはずの敵戦車は、何事もなかったかのように向かってくる。

サンダー一等兵は、そのやたらと角張った砲塔がこちらを指向しているのに気付く……

「やばい！」

サンダーが咄嗟に地面に伏せた直後、敵戦車の主砲が咆哮する。高初速で放たれたAPFSDSは、トーレス戦車の傾斜装甲を容易く貫徹し、その車内に破壊を振りまく……

「トーレス戦車が……」

瞬く間に二輦のトーレス戦車を葬った敵戦車は、もはや手が届きそうなほど接近していた。

そして分隊の面々はただ眺めるしかできない……それはトーレス戦車より大きく、圧倒的な威圧感を持っていた。

「おい！　どうするんだ？　これじゃ逃げられねえ」

今まで気付かなかったが、前方から多数の兵士と車両が近づいてくる。

「なあ、なんかやばくないか？」

「ああ。やばすぎだな」

『全員武器を捨てて投降せよ』

前方から二ホン兵の声が聞こえてきた。

「みんな武器を捨てろ」

「しかし！」

「そうしなければ全員死ぬぞ！」

『武器を捨てろ』

「さあ、武器を捨てて投降するぞ」

「うおおー！」

一人の兵士が狂ったかのように叫びながら、二ホン兵に向かって突撃する……ダダダッ……自動小銃の一連射によってその兵士はすぐに無力化される。

「ばかやろう！ ああなりたくなければ武器を捨てるんだ」

隊長の言葉で、サンダーは持っていた小銃を地面に置く……他の兵士も同じように武器を置いていた。

彼らは完全に二ホン兵に包囲されていた。

「俺たちどうなるんだろうな」

「どこかへ連れていかれるらしい」

「さあ、乗るんだ」

近くの二ホン兵に促されるがままにへりに乗り込む。彼らは皆一様に奇妙な模様の戦闘服を纏い、同じ模様のヘルメットを被っていた……そして顔にまで同じような色の何かを塗りたくっており、その表情を窺い知ることはできない。

サンダーはその姿に恐怖を覚えたが、それと同時に異国の兵士に興味を抱いていた。

そして意を決して近くの二ホン兵に話し掛ける……

「あの……」

サンダーより頭一つ分背の高い二ホン兵が、ギロリと睨み付けてくるのがわかった。

彼は何も喋らなかったが、その顔は何か用か？　と言ってるように見える。

「俺たちはどこへ連れていかれるのですか？」

「君たちには我々の駐屯地へ来てもらう。殺したりはしないから心配するな」

「はあ……」

また睨み返されると思っていたサンダーは、彼が質問に答えたのが意外だった。

「それから、本土にある捕虜収容所で戦争が終わるまで過ごしてもらう。しばらくは我慢することだ」

彼らに乗せたへりは、駐屯地へ向けて飛ぶ……その途中で重武装

の戦闘へりとすれ違う。

「あのへりは？」

「戦闘へりの隼だ」

「戦闘へり？ ハヤブサ？」

「隼は地上のあらゆる脅威を排除することができる。戦車が何輛いようと無意味だ」

サンダーの脳裏に、味方が一方的に殲滅される光景が浮かぶやたらと角張った大型戦車、空からは重武装のへり……

「着いたぞ。降りる用意をしろ」

サンダーはかなり時間が過ぎていることに気付く。

「降りるんだ」

そこは見たこともない広大な基地で、近くにはあの戦車が多数並び、多くの兵士が屯している。

「すごい……」

「なんて兵力だ……こんな相手にしたら十五師団は全滅だ」

「ああ」

彼らは二ホン軍の兵力を目の当たりにし、その強大さに圧倒されていた。

カール大陸西方海上
戦艦大和

ジャックス・ドレイク中將を含むバルアス軍將兵を乗せた大和は、タリアニアへ向けて航行していた。

彼らは空いた居住区で過ごすことを許されている。もちろん銃を持った見張り付きではあるが。

「それにしても……なんという広さだ」

ドレイク中將はある程度の自由を許されていたが、この大和の広さと複雑さに半ば呆れ始めていた。

「甲板に出るのにこれほど迷うとはな。海軍軍人として諦めるわけにはいかん」

「こんなところにおられたのですか」

後ろから声を掛けられ、振り返る。そこにいたのは大和艦長であった。

「タケダ大佐、すまんが私を甲板まで案内してくれんか？ 海を眺めたいと思つてな」

「お任せください。それならいい場所があります」

「ではお願いしよう」

武田とドレイクは、いくつかの扉を抜け、あるエレベータの前に

出る。

「さあ行きましょう」

「このヤマトは本当に巨大だ……そして外界の音すら遮断する分厚い装甲に覆われているようだ」

「この艦は数々の戦場を見てきました。それらを生き抜き、今も現役でやっているのです」

「ヤマトは古いのか？」

「ええ。大和は就役から既に七十年以上が経過しています」

「七十年！？ 常識的に考えれば耐用年数を大幅に……」

「幾度となく近代化改装が行われています。さて、到着しましたよ」

二人は第一艦橋に足を踏み入れる。

「さすがに高いな」

そこからは艦隊の陣容を容易に把握することができる。バルアス海軍の巡洋艦では味わったことがない感覚……

「素晴らしい眺めだ。感謝する」

「タリアニア到着まではまだ時間があります。それまではゆっくりしてください」

「ああ」

ドレイク中將は外を眺めながら、遠い祖国に思いを馳せる。

第十一話

7月15日

カール大陸北部

17時20分

「閣下！」

「いきなり入ってくるとは失礼なやつだな。何かあったか？」

ロザエル・トセル少将は、許可もなしに司令部テントに飛び込んできた通信兵を見る。

「はっ！ 内陸三十キロ付近で二ホン軍と戦闘状態に突入した模様です」

「何っ！？」

「既にトールス戦車多数が撃破され、戦死百名以上、敵戦力はこちらより優勢とのこと」

「なんだその被害は……どうなっておる」

「敵は現在も増大中、軍団規模の兵力を投入してきたみたいです！」

「ロレイス大佐、信じられるか？ 軍団規模の兵力を投入するなど……正気の沙汰ではない」

「軍団規模？ そんな兵力を投入できるはずありません！ 見間違えたんじゃないでしょうか」

「戦闘部隊と通信はつながるか？」

「先程から通信できない状態です！」

「つながるまで呼び出し続けるんだ。一体何が起こってある……」

ゲロビーチより内陸の地点では、二ホン軍の奇襲によってバルアス軍の各部隊が恐慌状態に陥っていた。

「くそっ！ 司令部と通信できない！」

「連隊長！ 二ホン軍の戦車が近づいてきます！」

「もう来たのか！？」

四十五連隊長のワズディン大佐は、信じられないとも言いたげな顔をする。

「もつと持ち堪えるんだ！ 二ホン軍の戦車なんぞ鉄屑にしてくれるわ！」

二ホン軍の戦車はすぐ近くまで接近し、その振動は連隊本部まで伝わってくる。味方のトールレス戦車は悉く撃破され、もはや対抗手段のなくなった四十五連隊の兵士たちは、二ホン軍に追い立てられ北部へ撤退を始めていた。

「能無しめ！ 逃げたいなら逃げやがれ」

ワズディン大佐がそう叫んだ直後、巨大な戦車が連隊本部テントを大佐ごと踏み潰した……

帝国陸軍第五機甲師団の90式戦車は、その機動力を活かし森林地帯を突き進む。その姿を見たバルアス軍将兵は機関銃や小銃で反撃してくるが、通用しないと分かると武器を捨てて逃げてしまう。

「その調子で逃げてくれれば楽なんだが……」

戦車長の佐々木 俊昭大尉は、逃げていくバルアス兵を見ながら呟く。

しばらく進むと、進路上に敵戦車が立ちはだかるのが見えた……

「くそつたれが！ そんな戦車で勝てると思ってんのか？」

目の前に現れた61式戦車にどことなく似た戦車を見て、佐々木大尉は一人で怒鳴る。

「前方、敵戦車！」

「目標敵戦車、照準よし！」

「徹甲弾装填」

「装填よし」

「撃て！」

120mm砲が咆哮する……ペリスコープから敵戦車を見ていた佐々木は、それが瞬時に戦闘力を失ったことを理解する。

「奴らと我々では装備に差があり過ぎるな」

佐々木は自軍より圧倒的に不利な敵を、ある意味気の毒に思っていた。そしてそのような装備で兵士を戦地に送り込むバルアス共和国に、憤りを感じずにはいられなかった。

帝国軍は太平洋戦争の教訓を活かし、人命を重視することを徹底する。その結果、前世界ではアメリカと並んで人命を重んじる軍隊として各国から評価され、国内では若者が積極的に軍に志願するようになっていく。

帝国には二年の兵役義務があるが、二年の兵役を終えてもそのまま残留を希望する者も少なくない。

『各隊、停止せよ』

大隊長の指示で、進軍していた戦車隊が停止する。

後方では装甲車やヘリから吐き出された大量の兵士が、進軍の時間を静かに待っていた。

「一方的だな……」

キューポラから顔を出した佐々木は、周りの惨状を見て思わずそんな言葉が出る。それと同時に血と硝煙の臭いが鼻をつく……

「この臭いには慣れたくないもんだ」

バルアス共和国
首都タレス
大統領宮殿

「海軍が負けただと!？」

テルフェス・オルセン大統領は報告に来た海軍関係者に掴み掛かり、大声で怒鳴る……

「この世界最強を誇る共和国海軍が負けるなど信じてたまるか！」

「しつ……しかし大統領、これは事実なのです。戦闘海域と思われる場所で、残骸と重油が浮いてるのが見つかりました」

「それはニホン軍の物ではないのか!？」

「我が共和国海軍の軍艦旗も浮いていたとのことです……!」

「なんということだ……」

「早急に防衛大臣を呼び出せ。それから例の作戦はどうなっている?」

「ニホンの領土と思われる島を発見した模様です」

「そうか。どうやら成功しそうだな」

大統領は自室からタレスの街並を眺める……その顔には笑みが浮かんでいるように見えた。

7月16日

10時20分

日本海

竹島沖

「艦長、あの島は無入島のような」

「うむ。ニホンの船はいないか？」

駆逐艦ローダーの艦長、ウィンクス・ポリマー少佐は副長に問い掛ける。

「今のところ見つかっておりません」

「見つけたら直ちに攻撃せよとの命令だ。監視を怠るな」

「はっ！」

「艦長！ ニホンの船を発見しました！」

「本当か？ 軍艦じゃないだろうな」

「おそらく漁船かと」

「漁船か……しかし命令は絶対だ。攻撃するぞ」

駆逐艦ローダーは就役から二十年が経過する老齡艦である。13センチ主砲と魚雷で武装し、敵艦に肉薄攻撃を仕掛けるのが主な役割であった。

しかし昨年、主力艦隊から地方の警備隊へ移籍、ローダーは新鋭駆逐艦に主力の座を奪われたのだ。

だがそこへ目を付けた人物がいた……防衛大臣のダレン・ディビスだった。彼はこの老齡艦に名誉ある作戦を任せた。

それは二ホン近海に進出し、民間の船舶や沿岸への攻撃を行うというものである。

「戦いの神はこの老いたりにチャンスを与えたようだな……二ホンの船に主砲攻撃を行う！」

ポリマー少佐は遠くに見える漁船に目を向け、不適な笑みを浮かべる……

「悪く思ふなよ。我々に見つかったからには攻撃を受けてもらう

……右砲戦用意！」

「右砲戦、目標、二ホン船」

「撃ち方はじめ！」

艦橋前方に設置された二基の13センチ砲が射撃を開始する。異変に気付いた二ホン漁船は退避を始めるが、もはや手遅れであった。

「逃げても無駄だぞ。当たるのは時間の問題だな」

軍艦と漁船ではあまりにも差があり過ぎた……ローダーはあつという間に漁船との距離を詰め、その砲撃精度は高まっていく。

「命中しました！ 轟沈です！」

「よくやった。引き続き周辺の監視をしておけ」

駆逐艦ローダーは沈んだ漁船に興味を示すことなくその場を離れていく。

京都府舞鶴市

舞鶴軍港

「漁船からの連絡によると、駆逐艦サイズの軍艦みたいです」

「その漁船はどうなったか分かるか？」

舞鶴基地司令の坂口 英明中将は、漁船の安否を確かめる……

「先程から音信不通です。おそらく攻撃を受けたのではないかと

……」

「くそっ！ これ以上民間に犠牲者を出す訳にはいかん！ 最も近い艦はどこだ？」

「はっ、演習で境港に寄港中の霧島が最も近いです」

「直ちに霧島へ連絡するのだ！」

「了解！」

鳥取県境港市

巡洋艦霧島は、その巨体を岸壁に預けていた。

霧島は全長220m、基準排水量1万2千トンを誇る大型巡洋艦として就役して以来、舞鶴の第五艦隊に属している。

今日は美保湾で行われる演習に参加するために、ここ境港に寄港していたのだ。

「来月は美保関事件の慰霊祭がある。総員、英霊に恥ずかしい所を見せることのないよう、努力奮励せよ！」

霧島艦長の山田大佐は明日から始まる演習に向けて、乗員達へ訓示を行っていた。そこへ通信士官が走りより、山田に耳打ちをする。

「何っ！？ 分かった。直ちに向かわねば。出港用意だ！ 機関始動！」

艦の深部から、三菱重工製ガスタービンが奏でる甲高い音が伝わってくる……4基で12万馬力を発揮する霧島の心臓が覚醒した瞬間だ。

霧島はゆつくりと岸壁を離れ、島根半島の地蔵崎を迂回する進路を取る。

近くにいた漁船は、その邪魔にならないよう一斉に退避を始めた。彼らは皆、霧島に向かって手を振る……そこには旭日旗を振る人の姿もあった。

第十二話（前書き）

またまた遅くなりました。

第十二話

7月16日

13時00分

日本海で操業中の漁船撃沈される

このニュースは瞬く間に帝国全土を駆け巡り、国民に少なからぬ衝撃を与える。

出港から既に二時間……霧島は日本海の荒波の中を航行していた。転移後の日本海は以前にも増して荒れやすく、航海には注意が必要であるが、霧島は波に揉まれながらも余裕といった感じで突き進む。

艦長の山田は波しぶきのかかる艦橋から海を眺めていた。

「今夜あたり大荒れしそうだな。敵さんも気の毒だ」

「その通りですよ。バルアス共和国近海は穏やかな海だとか」

「我が海軍の艦艇は対策を徹底しているからな。この程度の波浪は怖くない」

「対策を施していない軍艦がどれほど耐えられるか見物ですな」

「ああ。しばらく様子を見るか」

日本海
竹島沖

駆逐艦ローダーは強風と波浪によって大きく揺さ振られていた。

「なんだこの海は……こんなに荒れるとは聞いてないぞ！」

ポリマー少佐はバルアスの穏やかな海がどこまでも広がっているものと信じていた。

しかしここは想像以上に荒々しく獰猛な波が襲い掛かってくる……
つい一時間前まで静かだった海が急に姿を変えたのだ。

「まだ作戦は始まったばかりだ。いずれこの波もおさまるだろう。
しばらくの辛抱だ」

「艦長……どうも船酔いになったみたいで」

「情けないな副長。海の男たるものが船酔いとは……しばらく休んでくるといい」

「しかし、この艦のどこへ行っても相変わらずな揺れでして……
結局ここに帰ってきました」

「そうか。おさまるまで耐えるしかないな」

「やや揺れが大きくなったような……艦長、まずくないですか？
このままだと危険かと」

「たしかにな……海に出て三十年、こんな荒れた海は今まで見た
ことがない」

ポリマー少佐は荒れる海を見て心配そうに呟く……彼は海の男として、自然界からの警告を確実に感じ取っていた。

空はどす黒い雲に覆われ、今にもローダーを飲み込もうとしているかのようだ。

「副長、乗員を警戒配置に。非番の者も例外ではない」

「はっ！」

その時、一際大きな波がローダーに襲い掛かった。上下左右に揺さ振られ、艦内の人間は床や壁に叩きつけられる……艦の各所からは大きな軋みが聞こえ、リベットに打ち付けられた鉚が緩む。

「ばかなっ……」

やっとの思いで立ち上がったポリマー少佐は、艦橋から見える光景に絶句した。

ローダーの艦首は、主砲の辺りから完全に切断され、どこかへ消え失せていたのだ。

「なんということだ……これでは作戦遂行は不可能だ。帰投すら難しいかもしれん」

「艦長！ 機関室への浸水により機関停止……航行不能です！」

「くそっ！ 敵に狙ってくれと言ってるようなもんじゃないかなんとかならないのか？」

「無理です艦長。たとえ動けたとしても後進するしかありません」

「そうか……仕方ない。しばらく漂流するしかないようだな」

ローダーは漂流状態のまま夜を過ごすことになるが、この時点では差し迫る脅威に誰も気付くことはなかった。

7月16日

20時20分

日本海

竹島沖

「敵駆逐艦の様子はどうか？」

「現在も航行不能のようです。ダメージが思った以上に深刻なんでしょう」

「そろそろ準備に取り掛かるとしよう。大尉、部隊を戦室に」

「はっ」

ここは攻撃型原子力潜水艦伊601の艦内である。漁船が沈められた際には比較的近くで潜航訓練を行っていたが、霧島からの通信を傍受し現場へ急行してきたのだ。

「霧島じゃ大きすぎて相手に気付かれるからな。それにしても……本当に気付いてないのか」

「劣悪なソナーか、対潜装備を持っていないか……まあ持っていないも見つからないでしょう」

副長が自身ありげに言うのには根拠があつた。

伊600型潜水艦は徹底した防音、防振対策が施されており、水中を30ノットで航行しても探知することができないと言われている。

実際、アメリカ海軍との演習では幾度となく空母機動部隊を「壊滅」させていた。

「領海侵犯は撃沈に値する。が、司令部から拘束せよとの命令だ」

「大島大尉以下十名、いつでもいけます」

「よしっ、では頼んだぞ」

深夜、ローダーに近づく影があつた……

黒いウェットスーツを着た影は艦首付近の水中から接近し、待機している。切断された艦首付近には浸水した区画があり、そこから侵入できると判断したのだ。

「大尉、浸水した通路から艦内に入れそうです。扉がありますが簡単に開けられる物です」

「じゃあお邪魔するか。三人は艦尾から行け。気付かれるなよ」

大島は部下に指示を出した後、駆逐艦の通路に足を踏み入れる。そこで防水袋から消音器が装着された95式短小銃を取出し、簡単なチェックを行う。

部下も同じように装備を取出しチェックしていく……

「前進」

潜入部隊はゆつくりと艦内へ向かい進み始めた。

「艦長、乗組員に疲れが出ているようです。少し休ませるべきかと」

「うむ……では休ませよう」

「はっ、ありがとうございます」

「大変です！ 侵入者が！」

「なに！？ どこに侵入された」

報告に来た乗組員に聞いたですが、何かがおかしい……突如その背後から黒づくめの武装集団が飛び出してきた。

「何者だ！？」

「あなたが艦長か？ 大日本帝国海軍臨検部隊だ。この艦は我々が制圧した」

ポリマー少佐は拳銃を取り出そうとするが、黒づくめの男の正確な射撃で拳銃を弾き飛ばされてしまった。周囲を見回すと艦橋要員は皆取り押さえられ、もはや抵抗することは不可能な状態である。

「私をどうするつもりだ？」

「拘束する。その後のことは我々の知るところではない」

「乗員の身の安全は保障してくれるのだな？」

「ご心配なく。殺してはいない、寝かせているだけです」

「わかった。では拘束するがいい。しかし周りに船もないのにと
うやって来たんだ」

「すぐにお分りいただけます。」

そう言つと黒づくめの男は小型のマイクのような物に向かって、
何かを喋り始めた。

「迎えが来ます。外へ出ましょう」

ポリマーは黒づくめの男が発した言葉を理解できなかったが、甲
板から海を見て驚愕することになる。

甲板に出てしばらくすると、突如海面が盛り上がり、黒い何かが
姿を現した。

「あれは!？」

ポリマー少佐はローダーよりも長く、丸みを持ったそれがどい
うものなのか分からなかった。見た感じでは武装もなく、出っ張つて
いるものは艦橋と思われる場所だけで、ますます何の為にあるのか
分からなくなってしまう。

「あれはなんだ？」

「潜水艦です。では行きましょうか」

駆逐艦ローダーは漁船を1隻沈めたのみで、後日帝国海軍の標的艦として日本海に没することになる。

第十三話（前書き）

遅くなりました。短いですが投稿します。

第十三話

7月19日

バルアス共和国

首都タレス

この日、大統領宮殿は重苦しい雰囲気にもまれていた。

「その話は本当か？」

「私も信じられません。陸軍内でも猛将として知られるトセル少将の部隊が……こうもあっさりと敗北を喫するとは」

「ニホンめ……予想以上にやってくれるわ」

「大統領、カール大陸がニホン軍に掌握されたということはいずれ……いずれその大兵力にものを言わせて侵攻を開始するのは間違いないかと」

「なんと厄介な……防衛大臣よ、なんとかならんのか？」

テルフェス・オルセン共和国大統領は疲れきった表情で呻いた。

「お任せください。私に良い考えがあります」

ダレン・ディビス防衛大臣はとりあえずそう言ってみる……だが頭の中は大混乱である。

「大臣、君は昔から変わつとらんよ。わしが困ったときはいつ

もそう言っておったな」

「申し訳ありません。実は何も良い考えなどございません」

「やはりな……まあいいだろう。お互い、少し頭を冷やすべきだな。しかしこれほどとは……この戦争、なんとしても勝たねば」

7月19日

午後3時20分

日本海

帝国海軍に拘束され、巨大な巡洋艦に移乗したウィンクス・ポリマー少佐は、小さな窓しか設けられていない部屋の中で目を覚ます。

「くそつ。よりによってこんな騒がしい部屋に入れられるとは……一体何の音だ？」

ポリマー少佐は安眠を妨げる甲高い音に苛立ちを感じていたが、それがガスタービンの奏でる音だと気付くことはなかった。

「ん？ あれは……大きいな」

窓の外に巨大な軍艦が見える……それも1隻や2隻ではない。

ポリマー少佐は、それが舞鶴を拠点とする帝国海軍第五艦隊の主力だとは知るはずもない。

「これがニホン海軍……図体は大きいが貧弱な船が多いな」

そのとき扉が開き、一人の男が部屋に入ってくる……その男はポリマーの前に立つと、静かに口を開いた。

「無駄を徹底的に排除したら最終的にあんなったわけだ。よく見れば美しいと思わないかね？」

「ヤマダ大佐……この船もそうだが、あまりに武装が貧弱だと「まあ君には理解できないだろうな。我々の常識では肉薄して撃ち合う海戦は時代遅れなんだよ。さあ着いたぞ。大日本帝国へようこそ……ってところか」

「それにしても巨大な軍艦が多いですな。ニホンには」

「もつと大きい艦があるんだが。あいにく今は大陸にお出掛け中だな」

山田は遠くカール大陸に進出した巨艦の姿を思い浮かべた……

7月20日

13時30分

東京 皇居前広場

この日、皇居前広場は多くの人でごった返していた。遠く離れた大陸では戦闘が繰り広げられてはいるが、本土は嘘のように平穏な日々が続き、帝国陸軍の各部隊は暇をもて余している状態であった。

そこで近衛師団による観兵式が執り行われることになり、今日

に至っている。

戸山学校軍楽隊が吹奏する行進曲のもと、分列行進が開始される……陸軍分列行進曲の勇壮な旋律に合わせ、集まった観衆に昔と変わらぬ堂々たる行進を見せつける近衛師団の精鋭。

1人の老人は目に涙を浮かべながら、自分がいた頃と変わることはない分列行進を眺めていた。

「あの頃と変わっておらん。懐かしいものじゃ……時代は過ぎてても帝国陸軍の精鋭は今も昔も変わることはない……」

「閣下！　二ホン軍の猛攻により各部隊が救援を要請しています！」

「なんだと！？　もうこんなとこまで……」

ロザエル・トセル少将は驚愕していた。二ホン軍に攻撃された前線部隊が撤退を始めているのは知っていた。

だが前線の兵士の多くが戦死するか捕虜になったことをトセル少将は知らなかった。そのため二ホン軍が撤退する部隊よりも速く移動できるとは考えていなかったのである。

「二ホン軍はすぐそこまで迫っております！　戦車多数……我々の戦力では止めることは不可能でしょう。ご決断の時です」

「うむ。戦闘停止命令を」

「了解しました」

ロザエル・トセル少将は不意に目を覚ます。窓からは眩しい朝陽が入り込み、夜が明けたことを知らせていた。

「そうか……負けたんだっとな」

ここはカール大陸中部に位置する捕虜収容所である。戦闘停止後すぐに連れてこられ、二ホン軍の司令官と対談した。

戦死四千名……決して少なくない数字である。それだけの犠牲を払っても二ホン軍には何の痛手も与えることができなかった。

「共和国の頭の固い連中はこれでも戦争を続けるだろうな……」

そこで急に恐ろしいことが頭に浮かぶ……それは日本軍が十万人もの兵をここへ派遣していることだ。

「スミダ中将の話が本当なら、二ホン陸軍の総兵力は百万以上か」

窓の外を見ると多数の二ホン兵が走っているのが見える。

「ここにいるのは一部でしかないのか……これは共和国始まって以来の危機が訪れるかもしれん」

トセル少将は不安な面持ちで外を眺めることしかできなかった。

登場兵器（前書き）

本作に登場する主な軍艦と戦車についてです。

登場兵器

バルアス海軍

セレス級巡洋艦

全長185m

全幅18m

基準排水量8700t

武装

20.3cm砲連装3基

35mm機関砲4基

対艦ミサイルランチャー4基

速力33kt

砲撃戦とミサイル戦をこなすバルアス海軍最新鋭の巡洋艦。

主力駆逐艦

全長110m

全幅10m

基準排水量1250t

武装

13cm砲連装2基

4連装魚雷発射管2基

12.7mm機銃10丁

速力35kt

バルアス海軍の汎用駆逐艦。

バルアス陸軍

トールス戦車2型

車体長6 m

幅2 . 9 m

全高2 . 5 m

重量3 3 t

速度4 5 k m / h

主砲5 0 口径9 0 m m 戦車砲

副武装1 2 . 7 m m 機銃1 丁、7 . 6 2 m m 同軸機銃1 丁

帝国海軍

超大型正規空母

飛龍、赤城、加賀等

全長3 4 0 m

幅4 1 m

飛行甲板

全長3 3 5 m

幅7 6 m

満載排水量1 0 3 2 0 0 t

搭載機数9 5 機

速力3 2 k t

原子炉2 基

280000hp

前世界とこの世界において、最大の軍艦。

高雄型巡洋艦

全長230m

全幅23m

基準排水量18000t

吃水8m

速力35kt

兵装

60口径20・3cm単装砲2基

VLS126セル

ハープーン4連装発射器4基

20mm高性能機関砲4基

帝国海軍最大の巡洋艦。対空、対艦、対地等あらゆる戦闘で優位を確保するために開発された。

主要部には自艦の主砲攻撃に耐えられる装甲が施されている。

帝国陸軍

90式戦車

全長10・95m

全幅3・8m

全高3・05m

重量 60 t

速度 70 km/h

主砲 55口径 120 mm 滑腔砲

7・62 mm 同軸機銃

12・7 mm 重機関銃

乗員 4 名

装甲 複合装甲

帝国陸軍の主力戦車。攻撃力、防御力、機動性のどれをとってもトールス戦車を凌駕している。

登場兵器（後書き）

今後、戦闘機等も紹介できればと考えています。

第十四話

7月25日

バルアス共和国

タレス軍港

朝6時を過ぎた頃、タレス軍港にはバルアス海軍の誇る軍艦が多数停泊していた。

バルアス共和国海軍第1艦隊と第5艦隊合わせて40隻もの艦艇群は水雷戦隊で構成され、自国に近づく敵艦隊を迎撃するのが主な任務とされている。

「第1艦隊と第5艦隊を臨時に統合運用する。名称は第1任務部隊か……しっくりこないな」

第1艦隊司令官のフェーブルス中将とケルガン大佐は渋い表情で文面を何度も読み返す。

「この大規模運用……何かあるな。大佐、これは何を意味するのか」

「第2艦隊が壊滅的な打撃を受けたと……私はそのように聞いております」

「そうか。しかし壊滅とは……ニホン海軍は弱小ではなかったのか？」

「我々はニホン海軍を過小評価しすぎていた……そうとしか言えないですな。ニホン海軍は予想以上に強大ということですよ」

「戦う前から敵を弱いと決めつけるのは危険だな。ドレイクの奴、油断したか……」

「二ホン海軍の動きには注意が必要でしょう。近づきすぎるのも危険かと……そうするとこちらの得意とする魚雷戦には持ち込めません」

「それでは戦えんではないか！ 大佐、君に作戦の立案は任せる。出撃までに何かいい作戦を考えるんだ。二ホン海軍を叩き潰すためのな……」

「はっ！」

10時20分

カール大陸北西30km

第1、第2空母戦闘群

その艦隊はこの異世界で異様な存在感を放っていた。飛龍、赤城、加賀の3隻の巨大な原子力空母を中心に多数の巡洋艦、駆逐艦が護衛として付き従う。

本土から進出した第1空母戦闘群は第2空母戦闘群と合流、バールス共和国への空爆を行うべく、ゆつくりとした速度で北上していた。

飛龍の艦橋では中川忠少将が司令官席に腰掛け、何やら考え事をしていた。

帽子を深く被り、いつも艦橋の司令官席に腰掛け考え事をしてる姿が居眠りをしているように見えるため、陰では眠りの中川と

呼ばれている。

「敵艦隊がタレスに集結してるようだな。少佐、打撃戦隊を切り離しておくべきか？」

中川は低い声で呟いた。

少佐と呼ばれた背の低い男……岡崎和夫はそれを聞いて少しの間を置いて答える。

「敵の規模は？」

「巡洋艦、駆逐艦合わせて40隻」

「あまり気にしなくてもよさそうですが……念のため航空隊を対艦兵装で向かわせましょう。ここなら烈風の行動半径内です」

「よし、では直ちに攻撃隊発艦の用意だ。すぐに出すぞ」

中川の命令によって各空母の飛行甲板に、対艦ミサイル4発を装備した烈風が姿を現す。蒸気カタパルトの力を借り、順次発艦した烈風は上空で編隊を組む……飛行隊長の松尾和雄中佐は飛龍隊10機を率いて一路、バルアス共和国首都タレスを目指していた。

コックピットのディスプレイに表示された情報を見るが、まだ目標を捕捉しているはずもなく、ただ目標までの飛行経路が表示されているだけだった。

松尾は懷からサンドイッチを取り出し、それを食べ始める……

「隊長、見えてますよ。俺ら飯抜きで出撃したのに……」

横を見ると河野大尉の烈風がすぐ近くに来ていた。

「それが上官に対する物言いか？ 腹が減っては戦はできん
と言うだろう。貴様も持つてるだろ」

「申し訳ありません、中佐殿。自分も持つております。他の奴
も機内持ち込みしてます……」

「やっぱりそうか。あのやかましい整備隊長にバレてないだろ
うな？」

「もちろんです。あの人にバレたら格納庫の清掃確定ですから
……」

「それより、作戦内容は覚えてるな」

「はい。しかし対艦ミサイル4発とは奮発しましたね」

「ああ。長居するつもりはないからな、発射したらさっさと帰
投するぞ」

「了解！」

13時55分

バルアス共和国領海内
バルデラ島

首都タレスから280km離れたこの島は、カール大陸攻略の
ための中継地点であり、共和国防衛の最前線としての機能を有して
いた。

東西に15km、南北に8kmの小さな島ではあるが、そこに

は1個歩兵連隊と空軍の1個戦闘飛行中隊、海軍の駆逐隊が置かれている。

島の北東部に位置する飛行場では空軍のTAA-87が翼を休め、パイロットは詰所でいつものように暇な時間を過ごし、今日もそれが続くと誰もが感じていた。

だがそれは唐突に鳴らされたサイレンの音で脆くも崩れ去る……

「何事だ!？」

基地司令のオルラン大佐は椅子から転げ落ちそうになりながら叫んだ。

その直後、机の上に置かれた電話がベルの音を響かせる。

「こちらバルデラ飛行場、何があった?」

「早期警戒レーダー基地のサーストン大尉です。南東より国籍不明機多数が接近、まもなく到達します」

「なに? 貴様らレーダー員は何をしておった! もう到達するだと」

「も、申し訳ありません! ですが突然現れたんです」

「レーダーで捕捉できない超低空を飛んできやがったか。生意気な……それは二ホン軍機か?」

「二ホン軍機で間違いないかと……」

その時、オルランはジェットエンジンの発する甲高い音が近づいてくるのを感じた……（くそつ、緊急発進の暇も与えてくれねー

か)

外を見るとパイロット達は既に愛機のコックピットに滑り込み、いつでも離陸できる状態であった。島の南部からは高射砲の重苦しい射撃音が響き渡ってくる。

オルランは無線機に向かって叫ぶ

「緊急発進待てっ！　今からでは間に合わん」

そう言ったあと南側の窓に駆け寄り、空を見上げる……高射砲弾が炸裂し、辺りに黒い花が多数咲いたような錯覚に陥る。

「見えた！」

その黒い花よりも遥かに高空を飛行する二ホン軍機……たとえば緊急発進が間に合ったとしても、あの高度に到達するのは至難の技であるように思えた。

「数は20……いや、30はいるな。それに速い」

それらはこの島に興味がないかのように共和国本土に向かって飛び去っていく。

「こちらバルデラ島オルラン大佐だ、二ホン軍機およそ30機が本土へ向かっている！」

タレス軍管区直通の電話で緊急事態を知らせるが、空軍基地のジョン・マロー大佐は冗談はよせと言ってまともに話を聞こうとしない。

「オルラン、悪い冗談だろ？ カール大陸から飛んできても帰れないよ」

「ジョン、それは我々の戦闘機の常識だ。だがニホン軍がそれ以上の物を持っていないとは限らない！」

「お前もうちの少佐と同じようなことを言うのだな。あいつ、音速を超える飛行物体を見たとか言ってたな」

「それだよジョン！ 俺も見たんだ。緊急発進させるべきだ！」

「わかったよオルラン。何が来るか知らんが叩き落としてやるさ」

「頼んだぞジョン」

松尾は烈風の機上から眼下の島を眺めていた。

「派手に撃ってくるな。しかしその高さじゃ当たらないな……隊長機より飛龍隊各機へ、まもなくアタックポイントだ。しっかりやるぞ」

「隊長、どうやらタダではやらせてもらえないようです」

河野大尉の言葉でレーダー画面を見る……

「戦闘機を上げてきたな。お手並み拝見といくか」

これから始まるであろう空中戦に、松尾は心踊らずにはいられ

な
か
っ
た。

第十五話（前書き）

なんかグダグダですが。

第十五話

バルアス共和国
首都タレス上空

カルロス・デラーク少佐は確信していた。これから迎え撃つ正体不明の飛行物体……それがニホン軍の戦闘機であると。

「デラーク少佐、君の目で確かめてきてくれ。本当にT A I 87を超える戦闘機が存在するのかを」

「はっ！ 共和国の空は我々が守ります」

無線が切れる……改良型の無線は司令部からの声も明瞭にデラークに届けていた。

高度1万メートル、地上とは比べ物にならない低温……電熱服に身を包んではいるが寒いことに変わりはない。

「ニホンの戦闘機はここより高いところを我々の戦闘機より速く飛べるのか……」

初めて遭遇したときからT A I 87では対抗できないと感じていたが、実際に戦ってみないとわからない。

「こいつがどこまで通用するか試してみるか」

「首都早期警戒隊より通信！ 敵機からミサイルが発射され

た模様！」

「くそっ！ まさか艦隊を狙ってきたのか。戦闘機にミサイルが装備されているとは……」

タレスより120kmほどの場所に対艦ミサイル……06式空対艦誘導弾を発射した烈風各機は、着実に迫りつつあるバルアス軍の戦闘機を捕捉していた。

06式空対艦誘導弾はあらかじめ設定された目標へ向けて飛翔する。その数120発……それは前世界にかつて存在したソビエト連邦海軍が、日米の空母機動部隊を確実に殲滅するために考案した飽和攻撃を連想させる。

松尾は機体が軽くなったのを感じた。重量500kg以上の対艦ミサイルを4発ぶら下げていたが全弾を発射したことにより、とてつもなく身軽になったと思えてくる。

しかし、烈風にはまだ対空ミサイルも残っている。

胴体下部に射程の長い5式空対空誘導弾が4発、両翼端には赤外線プラス画像誘導の15式短距離空対空誘導弾が2発。対空戦闘をするには十分過ぎる装備である。

松尾は兵装スイッチを5式空対空誘導弾の発射モードに切り替える。HUDに緑色のシーカーが広がる……緑色の四角形は、まだ見えない敵機を捕捉するたびに増えていく。

データリンクによる、目標の振り分けが完了するのにそれほど時間は掛からなかった。

5式誘導弾は4目標に対して同時にロックオンが可能であり、

1回の攻撃で全弾を敵機に向けて発射可能である。

一昔前のミサイルであれば誘導波を照射し続けなければならぬ面倒な物であったが、このミサイルは所謂撃ちっぱなしミサイルのため、発射後誘導波の照射は不要である。

緑色のシーカーは敵機をロックオンしたことを示す電子音と共に、赤色へと変わった。

「全弾発射！！」

松尾は勢いよく発射ボタンを押し込む……胴体下を離れた5式誘導弾は一旦後方へ置いていかれるが、次の瞬間推進剤に点火したそれは驚異的な速度で烈風を追い越す。

赤城隊と加賀隊は既に母艦への帰投を始めていたため、松尾ら飛龍隊の各機が敵航空機の足止めを任されるかたちとなった。敵機の数はおよそ60機、5式誘導弾が全て命中したとしても20機が残ってしまう。

「ちょうどいい、バルアス軍の戦闘機を間近で見ておくか」

「隊長本気ですか？ さつさと飛龍に帰ってお風呂でも……」

河野大尉が帰投を提案するが、それは松尾によって遮られる。

「まあまあ落ち着け。敵をこの目で見ておくことに損はないだろう」

「はあ、たしかにそうですが」

「せっかくのダンスパーティーのお誘いだ。これは断れない」

松尾はふざけた口調で冗談を言って見せた。

「隊長が招待されたなら我々も付き添わなければいけませんな」

河野もそれに同調してしまう。

それは一瞬であつた……

「前方より高速飛翔体接近!!」

カルロス・デラーク少佐は前衛の部下からの無線通信で前方を凝視した。それは戦闘機より速く飛行し、こちらへ向けて一直線に突っ込んでくる。

「いかん! 退避……」

言い終わるより早くそれらは前衛の機に次々と命中し始めた。

「くそっ!」

デラークはその光景を呆然と眺めることしかできない……一気に40機のTAA-87が叩き落とされた。

「少佐殿! 反撃しましょう! このままでは帰れません」

部下の悲痛な叫びが聞こえてくる……どれほど時間が過ぎただろう。

しばし呆然としていたデラークは時計を見るが、僅か1分程し

か経過していない。

二ホン軍の戦闘機は目に見えない場所から攻撃ができる。デラークはそれを考えただけで、T A I 87では絶対に超えられない隔絶した性能差を感じずにはいられなかった。

「少佐殿！ 聞いておられるのか！」

無線機からの部下の声でデラークは決断する。

「全機突撃するぞ！ 1発でも多く30mm弾をお見舞いしてやれ！」

「了解！」

「5式誘導弾全弾命中しました」

河野が淡々とした口調で松尾に報告する。

「やはり防御策はもっていないか……」

「奴らまだ諦めてないようです。20機が接近中」

「さすがはダンスパーティーの主催者だ。おもてなしに期待したいところだ」

河野は思う……この中佐殿は最初から敵との超接近戦を望んでいたのだと。

「隊長、まだ15式が残ってますが」

「そう早まるな。使い道はいくらでもある。今は温存だ」

「自分が思うに……温存すべきだったのは高価な5式かと」

「まあそう言っな。これでこちらが有利である可能性が高いことがわかったからな」

「たしかに、我が海軍航空隊の空戦技量はルフトバツフェにも勝るとか言われてますが」

「我々の真骨頂は格闘戦だろ？　まあレシプロ機に比べりゃ小回りも利かんし図体もデカイ。だがジェット戦闘機のこの時代でも格闘戦の訓練を続けてきたんだ。訓練の成果を見せてやるうじやないか」

「了解！」

「見えた、ニホン軍機だ！」

デラークはニホンの戦闘機の姿を視界に捉えた。両者は急速に距離を詰めていく。

だが、ニホン軍機の集団は唐突に散開する……

「俺にケツを見せたらどうなるか教えてやる！」

デラークは散開したうちの1機に狙いを定める

「これは!？」

接近して初めてその威容に気付く……濃い青色の塗装、TAI 87より面積の大きな主翼、二枚の垂直尾翼、尖った機首……何よりもその大きさに驚いてしまう。

「だが図体だけでかくても空戦でケツを取ればこっちのもんだ!」

デラークは慌てて回避行動をとる敵機に（少なくともそう見えた）急速に距離を詰めていく。

「その図体じゃ素早い動きができないか？　すぐに落と……」

最後まで言えなかった。いや、言葉を発することもできない程の光景を見た気がした……

「なめてもらっちゃ困るな」

河野は後方より迫り来るバルアス軍機を、上昇に転じながら烈風の驚異的な加速で一気に振り切る。

急角度での上昇にも関わらず、2基の三菱重工製ジェットエンジン『JT05M』は圧倒的な推力で重い機体を高空へ押し上げる。

「この加速がたまらん。さて、ついてきてるか？」

後ろを振り返り、敵の姿を探す……そこには、遥か後方から必死に追従しようともがく敵機がいた。

「まるでメッサーシュミットのMe262だな」

河野はバルアス軍の戦闘機を見て、もはや博物館でしか見るこ
とのできない機体を思い浮かべる。

「うむ、やっぱりそう見えてしまう。おっ？ 反転するか…
…」

敵機は上昇についていけず諦めたのか、反転して離れていく。

「ニホン軍はあんな化け物を！？ とんでもない上昇力とス
ピードじゃねえか」

ニホン軍機は急角度の上昇を苦にすることなく、信じられない
スピードを発揮していた……そしてTAI87では対抗できないと
判断し、デラークは愛機を反転させることしかできない。

「機体もそうだが、俺の体もついていけない……何かが根本的
に違う！」

「隊長！ 助けてください！」

「どうしたんだ！？」

「ケツにつかれています！」

周囲を見回すと、1機のTAI87が例のニホン軍機に追い

回されていた……その主翼の付け根が煌めいたかと思うと、曳光弾がT A ー 8 7 の胴体に突き刺さっていく。

攻撃を受けた味方機は胴体から火を吹き機体の破片をばらまきながら下界へと落ちてゆく。

「マルクス！」

しばしの間撃墜された味方を見ていたため、後方から迫り来る脅威に反応するのが遅れてしまう。

ガンガンガンガンッ

その音で現実に取り戻されるが、もはや手遅れであった。後ろを振り返ると上昇していた筈の敵機が、その主翼の付け根に装備された機関砲を射撃する姿が目映る。

気付けば機体の自由が利かない……

「くそっ！ 操縦系統がやられたか！」

もう一度後ろを振り返ると、二ホン軍機は自分に興味をなくしたのか離れていくところだった。

「脱出してください隊長！」

「そうだな、この機体じゃタレスまで帰れそうにない」

周囲の敵機は完全に興味を無くしたらしく、南の方へ飛び去っていく。

「帰ったか……」

デラークはそう言つと射出レバーを引く……キャノピーが吹き飛び、圧縮空気により座席ごと射出される。

「くっ！」

海上か、救助はいつ来るんだろうか

そんな思いを抱きながらデラークはパラシュートで降下していく。

番外編〜〜あるスパイの1日〜〜（前書き）

ちよつと息抜きです。

番外編――あるスパイの1日――

7月15日

広島県呉市

長門ミュージアム

呉駅から海の方へ歩いていけば、嫌でも目に入る巨大な艦影。記念艦として呉にその巨体を落ち着けた長門は、今でもその威厳を保ち続けている。

バルアス共和国陸軍情報部に属するスパイ、マルセス・ダレイシスは、タリアニア経由で日本入国を果たしていた。

「この国は一体どうなっておる……」

マルセスはとてつもない存在感を放つ巨艦の前で呆然と立ち尽くす。

思えばニホンに来てから驚きの連続であった。

「超巨大建造物に道路網にシンカンセン……そして軍事力」

何かを思い出すように目を閉じる……

偽造の身分証がタリアニアで通用したことに安堵したマルセスは、ニホン行きの船便があると聞き港へと向かう。

タリアニアの街はタレスより遥かに都会であり、さらにそれがニホンの助力によって構築されたものだと思っていた。

「大きい街だな。これが本当に二ホンの力で……」

しばらく歩くと港に辿り着く。よく整備された港湾と多数の大型船が並ぶその光景は、タレスのそれより大規模なものだ。

「あの、二ホン行きの船はどこから？」

近くの男に尋ねる。

「それなら週に1往復あるよ。あと1時間後に出港だね。戦時だからって物騒な軍艦も一緒だよ」

「そうなのか？　今からでも乗れるだろうか」

「ああ、それならあそこのチケット売り場へ行くといい」

「そりゃどうも」

男と別れたマルセスはチケット売り場へ行き、窓口の前に立つ。

「今日の二ホン行きのチケットをくれ」

「お支払いは二ホン円かタリアニアドルどちらで？」

「タリアニアドルで頼む」

「では125ドルです」

「なかなか高いな」

「1週間の航海中は食事も寝る場所も困ることはありません。そう考えればお安いですよ。あとパスポートはお持ちで？」

「パスポート？」

「ニホンに入国するにはパスポートが必要です。市民証明があればすぐ作れますが」

「ここにある。作ってくれ」

そう言って偽造した市民証明を差し出す。

「わかりました。しばらくお待ちください」

5分ほどで仮のパスポートが発行され、マルセスは巨大な貨客船に乗り込む。

「大きな……これがニホンの船か」

全長300m、総トン数12万tの貨客船を見上げると、バルアス共和国のどの船よりも巨大であることがわかる。沖合いには護衛の艦船だろうか……駆逐艦らしき影が見える。

マルセスは船室へと入っていく。そこには既に多くの人が集まり、出港のときを待っていた。

「共用とは聞いていたが……これじゃ寝る場所を確保するだけで終わってしまうな」

ある程度は広さがあるものの、ただ絨毯を敷いただけの簡易な

船室だ。この場の全員が寝れば、足の踏み場もないことは容易に想像できた。

「あの船旅は長かった……シンカンセンは速すぎた……」

ひとしきり回想したマルセスは目を開ける。目の前には相変わらず巨艦が居座っていた。

「よし、艦内の見学といこうか」

マルセスは巨艦への入口を兼ねたミュージアムへとむかう。その中は様々な展示物が整然と並んでおり、軍に所属するマルセスを刺激するには十分すぎた。

まず最初に目に入ってくる巨大な筒状の鉄の塊……

「これは？」

すかさず説明文を読む。幸い、ニホン語とタリアニア語で表記されているため、タリアニア語を習得したマルセスでも読める。

「バトルシップムツの41cm主砲の砲身だと……」

改めて鉄の塊を見る。

「これが戦艦というものか。共和国とは歩んできた歴史が違うのだな」

続いて目に入ったのは巨大なジオラマだ。海の上に多数の艦船模型が並び、どうやら海戦の模様を表現しているものらしい。

「太平洋戦争に於ける最大規模の海戦……マリアナ沖海戦か」

そのジオラマ上には長門と思われる模型もある。しかしそれ以上存在感を醸し出す軍艦があつた……

「あれはヤマトというのか」

近くのご案内にはこう表記されていた。『ヤマト、ムサシは米アイオワ級戦艦4隻を相手取り、これを撃退した。ナガト以下ヤマシロ、フソウ、イセ、ヒュウガはその他の戦艦群と撃ち合い、ニユーメキシコ、サウスダコタ、ノースカロライナを撃沈する。しかしヤマシロ、フソウを失うこととなった。早朝からは空母部隊同士の戦いが行われた……』

「こんな戦いが半世紀以上も昔に行われたのか？」

マルセスはニホンという国が持つ軍事力を実感し、冷や汗を流していた。

「いよいよナガトに乗艦だな」

マルセスは建物2階から伸びるスロープを渡り、長門の艦首に降り立つ。

「塔のように高い艦橋は測距儀を高い位置に置いたためか？」

高くそびえ立つ艦橋を見上げ、それとなく呟いてみる。

巨大な主砲塔から伸びるこれまた巨大な砲身……バルアス海軍

からすれば規格外どころの話ではない。

主砲付近には長門の要目が記載された案内板が立てられている。

「基準排水量39120t……桁違いだな。我が国にこのような構想が生まれなかったのが不思議だ」

バルアス共和国では巨大な主砲を巨大な船体に載せるという考えが生まれなかった。それを持つ国がなかったことと、巡洋艦を主力とした機動性重視の艦隊整備を行ってきたからだ。

「そして軍艦に戦闘機を載せるというのも信じられん……帰ったら大臣に具申してみるか。いや、具申したところで設計には時間が掛かるし、建造にも相当掛かるだろうな」

マルセスはミュージアムで見た小沢艦隊の布陣を思い浮かべる。

「だが実現すれば、主砲よりも遠くまで攻撃できる……今後の軍事計画としては最適だな」

「おい、あんた」

不意に声を掛けられ後ろを振り向くと、老人が立っている。

「あんた、タリアニアから来たんか？」

「はあ、そうですか」

「ちょうどいい、ワシの話を聞いていけ。ワシは1945年4月、こいつに乗組員として配属された。まさかあの戦争の行方を左

右する海戦に参加するとは思わなかったが……」

「あなたはこの戦艦に？」

「そうじゃ。一時期は世界最強のビッグ7の一角じゃった……偉大な艦じゃの」

「その手は……」

「ああこれか？ 敵戦艦の砲弾が命中した時じゃ、離れていたのに破片に右腕を持っていたのかれた」

老人は肘から先を失った右腕を見ながら呟いた。

「そうでしたか……」

「だがこの長門はサウスダコタとノースカロライナを相手に奮戦した。そして2隻を撃沈することができた」

「この艦には数々の武勲がある……素晴らしいことですな」

マルセスはこの巨艦が活躍した遠い昔に思いを馳せる。異世界から来たニホンは、バルアス共和国より長い歴史を持ち、世界を巻き込んだ大戦を生き抜いてきた……

我々は負ける、だが負けることで新たな共和国の歴史が産まれる

「武蔵を見てくるといい」

「えっ？」

「長崎でモスボール状態で保存されておる。そのうち記念艦にでもなるだろうが……武蔵、帝国海軍の切り札である大和型二番艦」

「是非とも」

ついさっき、ミュージアムの模型で見た長門を凌駕する巨艦……それを生で見ることができると知ってマルセスの腹は決まった。

第十六話

バルアス共和国

首都タレス

タレス軍港

バルアス海軍第1任務部隊旗艦フリューダー……船体規模や排水量ではセレス級巡洋艦を凌ぐこの艦は、静かに出撃の時を待っていた。

就役したのは20年前だが、基準排水量10150tを誇る大型艦であり、主兵装として9門の20cm主砲と魚雷発射管を持つ。

「司令……早期警戒隊より、多数のミサイルが艦隊目掛けて飛行中とのこと」

報告する通信員の顔は青ざめていた。

「ケルガン大佐、対空戦闘の指揮を！」

「了解！ 対空戦闘用意！」

艦の各所に設置された機関砲や機関銃座に素早い動作で配置につく兵員達は、不安げに空を眺めていた。

ケルガン大佐は艦橋トップの防空指揮所の双眼鏡を覗きこみ、ミサイルの発見に全力を注ぐ……

「対空レーダーはまだ捕捉してないのか!？」

「まだ捕捉できません！」

「くそっ！」

悔しげに手すりを叩くケルガンは再び双眼鏡を覗く……「なっ！？　なんだあれは！」水平線より姿を現したのは、とてつもない数のミサイルであった。

「防空指揮所より対空戦闘部隊へ！　南方よりミサイル多数接近、叩き落とすぞ」

すると焦った40mm機関砲の一群が射撃を開始する……左舷に配置された6門の機関砲は狂ったように撃ちまくるが、まるで当たる気がしない。

多数の艦艇が停泊している関係で迎撃に参加できる艦が少ないため、弾幕は薄く効果が無さそうに見えてしまう。

「だめだ！　もっと引き付けて撃て！」

ケルガンが伝声管に向かって叫ぶ。その間にもミサイルの集団は高速で接近してくる……それらは急に上昇し各艦の対空射撃を一時的に停止させる。

「照準急げ！」

「だめだ、間に合わん……駆逐艦隊が！」

最も外側に停泊していた駆逐艦隊は、必死の迎撃の甲斐もなく

多数のミサイルに襲われた。一旦上昇したミサイルは急降下で駆逐艦隊に襲いかかり、その艦上に破壊をもたらす。

「なんということだ……くそっ！」

ケルガンは迫り来るミサイルを睨み付ける。その数4発……明らかにフリーダーの迎撃能力を超えている。

ドオン

突如響いてきた轟音に思わず音のした方向に目を向けると、主砲がミサイルの一群に向けて対空用の砲弾を発射したところであった。時限信管のそれは一定時間が経過した後炸裂し、ミサイルを撃墜するはずであった……だが炸裂した時には既にミサイルの姿はなく空振りに終わる。

ドオンドオンドオン　三連装の主砲は交互に射撃し、直ちに次弾を装填する。その時、フリーダーから離れた上空でひときわ大きな爆炎が発生する。

「やったぞ！　一発撃破！」

だがそこまでであった……

残る3発は機関銃と機関砲の迎撃をものともせず突っ込んでくる。

「もうだめだ！　総員衝撃に備え！」

ケルガンは指揮所で床に伏せ、襲いくるであろう衝撃に備える。

「ここまでか！」

悔しそうに床を叩いたとき、大きな揺れが襲ってきた。自分が生きているということは、艦橋が無事である可能性が高いと思ったケルガンは梯子を下り、司令塔へ向かう。

「司令！　ご無事でしたか」

「うむ、手酷くやられたな大佐」

「申し訳ありません……」

「いや、気にするな。しかしよく耐えきったな」

「被害は！？」

「この艦は大丈夫だ……といっても後部艦橋は2発のミサイルを受けて崩壊、詰めていた要員はおそらく戦死しただろう。左舷の対空砲、二番主砲塔が使用不能だ。幸いなことに艦の重要区画は無事だ」

フェーブルス中將は淡々とした口調で被害状況を読み上げた。

「他の艦艇は……」

「外側にいた駆逐艦隊が全艦戦闘不能、撃沈を免れたものもだ。巡洋艦で被害を受けたのはフリーダーだけだ。しかし7隻の巡洋艦だけではどうにもならん」

ケルガンは思った、この程度の被害で済んだのは、主砲での撃ち合いを想定して張り巡らされた装甲のおかげだと……魚雷発射管も頑丈な船体の内側にあり、真横から命中しない限り大丈夫かと思われる。

「司令、やはりこのフリーダー級こそが真の主力に相応しいかと」

「君もそう思うか。しかしミサイルの利点は遠距離攻撃にある。この艦に装備されていないのが残念だ。砲撃力はセレス級に負けな……だが遠距離からの攻撃能力を有していないこのフリーダーは時代遅れと言われても仕方ないか……」

フェーブルスは司令塔の分厚い壁にもたれて小さな窓から外を眺める。いまだに鎮火せず燃え続ける味方駆逐艦隊を見て、頭を抱えたくなる。

「完膚なきまでにやられた……このままでは共和国海軍は戦闘力を失ってしまうな。なんとかしなければ」

「司令、空軍の連中も随分とやられたようです。バルデラ島の北東200kmの地点で空戦があり、一方的にやられたと……」

「そうか……二ホンは我々より高性能な兵器を持っていると聞くが、どうやら本当のようだな」

その時、通信員がフェーブルスのもとへ駆け寄り、上層部からの命令を伝える。

「フェーブルス閣下、ダレン・デビス防衛大臣が今回の件に

ついて説明を求めています！ 至急出頭するようにとのこと！」「

「やれやれだな……」 フェーブルスは心底嫌そうに呟き立ち上がる。

7月26日

バルデラ島北東沖200km

カルロス・デラーク少佐は海上で救助を待ち続けていた。

「バルデラ島からそんなに離れていないはずだが……」

デラークは脱出したものの、海上だったため救助が遅くなるのは覚悟していた。しかしいざ待つとなると、今まで経験したことのない強烈な孤独感に襲われることになった。

「おーい！ 俺はここにいる！ 早く助けに来やがれ」

叫ぶのは体力を消耗するとわかってはいるが叫ばずにはいられない。時折、カモメがデラークの近くを飛び回り去っていく。

「あいつら俺が死ぬのを待ってるのか？ 鳥ごときに食われてたまるか！」

デラークはカモメに向かって叫ぶ。

「離れたか……」

彼は疲れていたため異変に気づくことはなかった。海面下で黒

く巨大な影が息を潜めていると……

突如、デラークから数十メートル離れた海面が盛り上がり、何かが姿を現した。

「なんだ！？　　鯨か？」

だがよく見ると、鯨とは違う無機質な金属でできた何かであることが窺える。

「……船？」

原子力潜水艦伊603は数日前からこの海域で哨戒任務についており、海上に何の脅威も存在しなかったため浮上したのであった。

「対空、対水上レーダーに感なし、いたって安全です艦長」

「そうか。やはり外の空気が一番だな」

艦長の中田元中佐は息を大きく吸い込むと、副長に向かって気持ち良さそうに言いはなった。

艦内の制御された空気よりも自然の空気が良いと素直に思ったのだろう。

副長の菊池敬少佐は同意するように頷くと、抜かりなく周囲を見渡す。

「ん？　　艦長、何者かが漂流しているようです」

「どれどれ……おおバルアス人か？」

「おそらく、見た目からしてパイロットでしょうか」

「よし、空母戦闘群に照会せよ」

「了解」

副長は艦内に戻っていき、数分後再び姿を現す……

「艦長、このあたりで空戦があったようです。その生き残りか
と」

「じゃあ救助しようか。どうするね？」

「それでよいかと」

「うむ、あとは頼んだ」

「了解！」

何やら謎の船からゴムボートが近付いてくる……

「救助には違いない。だが味方じゃなさそうだな」

デラークは近付いてくるボートを見ながら残念そうに呟いた。

第十七話

「バルアス軍人だな？」

ゴムボートに乗った二ホン海軍の士官と思われる人物が声を掛けてくる。ゴムボートには二ホン海軍を表す旭日旗が描かれ、すぐに二ホン人だと分かった。

「共和国空軍少佐、カルロス・デラークだ」

「貴官はこれより捕虜だ。無駄な抵抗はするな」

二ホン海軍の士官は素早く腰の拳銃を取り出せるよう態勢を整えている……

「わかってるよ。今抵抗しても死ぬのは目に見えている」

「ならば乗艦を許可しよう」

一言で言うなれば……「狭い」

謎の艦の内部は通路から各部屋に至るまで狭く、天井も低い場所が多い。個室ではあるものの、艦長室も例外なく狭い。

「艦長の中田だ」

自分よりも若いだろうか……がっしりとした体躯を二ホン海軍の白い制服の下に隠した男が椅子に座ったままデラークを迎える。

日焼けして赤黒くなった肌と短く刈り上げた頭は、共和国の軍人に比べ非常に戦闘的な印象を受ける。

本来バルアス人は戦闘民族ではなく、そのルーツは共和国建国前の商業国家だと言われている。

「救助していただいたことを感謝します」

「バルアス軍は隅々まで教育が行き届いているようだ。うちの若いのにも見習ってほしいもんだ」

「あなた方は二ホン海軍の？」

「任務の性質上、詳しいことは申し上げることができない。だが我々が大本帝国海軍であることは間違いない。なにかと狭い場所だがゆっくりするといい」

そのとき艦長室にある電話が鳴り響く……

「……艦長だ」

《艦長、対水上レーダーに感、小型艦4隻が接近中です》

「バルアス軍の駆逐艦か？ 気付かれた可能性があるな。少し様子を見よう……30まで潜れ」

バルアス共和国海軍駆逐艦パーカー

「艦長、搜索範囲が広すぎます……まだ機体の残骸すら見つか

りません」

見張りを担当していた下士官が疲れた表情もそのままに、艦橋の中に戻ってくる。

「味方を見捨てるわけにはいかん。引き続き搜索に専念しろ。それと、空軍にもっと増援を寄越すよう要請してくれ」

パーカー艦長のバロティス少佐はガラス越しに海を見ながら指示をする。

小型艦ならではの揺れが襲ってくるが、そんな中でもバロティスは動じることなく腕を組み立ち続けていた。

艦首は盛大に波を被り、その飛沫は艦橋にも容赦なく降り注ぐ。

「今日はやけに波が高いな」

「艦長！ 前方に戦闘機の残骸らしきものがあります！」

「うむ、あれは空軍のT A 87だな。両舷停止、搜索班は直ちに準備せよ。対空、対水上警戒を怠るな！」

「艦長、搜索班いつでも出せます！ 今のところ対空、対水上ともに接近する脅威なし！」

「うむ、引き続き警戒せよ。搜索班はすぐに搜索開始」

「敵艦停止しました。本艦直上、こちらに気付いた兆候すらあ

りません」

その言葉で乗員の誰もが安堵する。これまでの哨戒活動で敵が対潜能力を持つていないことを掴んではいたが、未だ確信には至っていないかったのだ。

「どれだけ騒ごうが気づいてもらえないだろうな。機関全力運転も夢じゃないか」

中田は口元に笑みを浮かべながら呟く。

「機関、前進微速。敵艦の背後に出るぞ」

直後、グツと加速する艦……水中でも30ktを発揮可能な機関は、水中排水量1万tに達しようかという艦体を軽々と前進させる。だが、そのような大出力にものを言わせ加速しても、艦内は驚くほど静かで、下手をすれば動きだしたことに気づかないだろう。

ロシアの潜水艦の脅威に晒され続けていた帝国海軍の潜水艦は、過去数十年に渡り養ってきた技術力により、他の追隨を許さない性能を持つに至った。

『ゴースト』

かつて最強の敵手であり同盟国であったアメリカ海軍にそう言わしめた、驚異的な静粛性の持ち主である。

「ソナー、敵艦に動きは？」

「動き出す気配すらありません」

「そうか。潜航したまま安全圏へ待避する」

7月28日

バルアス共和国

首都タレス

タレス軍管区会議場

「会議は10時から開始します。それまでどうぞごゆっくり」

「マーティン元帥閣下にお尋ねする。海軍の戦況が思わしくな
いことは既に周知の事実。負け続きの理由をお聞かせ願いたいのだ
が」

国政院議員の問いにあからさまに嫌な顔をしたのは、共和国海
軍元帥にして総司令官のフォルス・マーティン。年齢60、均整の
とれたスマートな長身を紺色の制服に包み、どこかお人好しな雰
囲気を醸し出す男……それが初対面で多くの人間が彼に抱く感慨であ
った。

「議員におかれては今回の敗北の責任すべてが海軍にあるとで
も仰りたいのか？」

「第15師団の壊滅も、海軍がしっかりしていれば避けること
ができたでしょう」

「貴様……戦場を知らない政治家が見てきたような言い方を！」

「二人とも落ち着け。今は責任の所在を話し合う時ではない」

ダレン・ディビス防衛大臣の声で会議場は一気に静まり返る。

「少し早いが始めるでしょうか……空軍のマロー大佐、貴官の部下は実際にニホン空軍の戦闘機を間近で見てきたということだが……」

「はっ、バルデラ島からの報告で……私はカルロス・デラーク少佐の飛行隊に出撃を命じました。帰還したのは……たった8機……60機出してたったの8機です！」

「帰還したパイロットは何か言ってたか？」

「ニホンの戦闘機は機動性、速度、武器搭載能力どれをとってもT A 87の比ではないと……全力で追尾しても引き離された」と

「そうか……マーティン元帥、君の意見を聞こうか」

「まず……艦隊決戦においてニホン海軍に勝つのは至難の技かと」

「……………！」

その瞬間、会議場の気温が一気に下がったような気がした。

「元帥、君は伝統ある共和国海軍が勝てないと言うのか？」

「セレス級4隻を擁する第2艦隊の壊滅……生き残りの将兵の話では、ニホン海軍の旗艦は超大型の戦闘艦らしい。そいつは1隻でセレス級4隻を沈めた……」

「それは本当か！？ 超大型とは一体どれくらい大型なんだ

？」

「私も信じられません……しかし事実です。大きさについては詳しくは聞いておりませんが、我が海軍最大のフリューダー級を遙かに上回る巨艦だとか」

「フリューダー級を上回る巨艦だと？」

「駆逐艦の生存者が写真を……」

マーティン元帥の横に座っていた士官が拡大された写真を鞆から取り出す……

「これは……！」

その写真は暗闇に浮かぶ1隻の軍艦を写したものであった。しかしそれが常識では考えられない巨艦であることもすぐにわかる。

「海軍独自に分析した結果、推定ですが排水量でフリューダー級の数倍、全長280m、主砲口径は30cm以上という結果が出ました」

「悪い冗談だ！」

どこからかそんな声が聞こえてくる。

「まことに信じがたいことですが、それが存在するのです……」

「その巨艦を打ち破る方法は？」

「残念ながらありません」

会議場は重苦しい空気に包まれるばかりであった。

第十八話

バルアス共和国

首都タレス

タレス軍管区会議場

会議が始まって既に2時間……ほぼ進展のないままいたずらに時間だけが経過し、頻繁に発言していた参加者も今や沈黙する者が増えていた。

「皆さんに見てもらいたい映像があります」

沈黙を破ったのは陸軍情報部に属する一人の男……

「情報部のアナト大佐か、何かあるのか？」

「タリアニアに二ホン海軍の拠点があるのは既に周知の通りですが問題はそこではありません」

「タリアニアに二ホン海軍の大艦隊がいるというだけで脅威だと思うが……他に重大な何かがあるというのか？」

「はい。そこに入港した大型の艦船……それを今から見ていただきたい」

アナトが目配せをすると、傍に控えていた男が映写機の準備をする。

「これは我が軍の戦略を根本から揺るがす重大な脅威です。どうか覚悟のうえで……」

アナトが合図をし映像が流れ始める。

「おお……なんと広大な」

そこに映し出されたのはとてつもない広さの港湾、そこかしこに停泊する艦船、ひっきりなしに行き交う将兵の姿。

それだけでもこの艦隊の規模がどれだけ大きいか容易に判断できる。しかしその視点が大型艦専用の区画に向けられたとき、会議場の面々は絶句するしかなかった。 「……これは？ ああ貧弱な大型艦ではないか？

だがこうやって見る限り……規格外の巨艦だな」

「全長は300m以上、推定の排水量は7万t以上。平らな甲板を持つ貧弱な船に見えるかもしれませんが、この船の真の能力を見れば……我々は考えを改めなければなりません。ここを見てください」

別の角度から撮られた巨艦の映像、そこにある予想外のものに、次こそ全員が絶句する。

「……！！」

「これは戦闘機です。この艦は洋上基地そのものと言えるでしょう。噂では戦闘機を最低でも60機搭載しているとか。今までの目撃情報から、二ホン海軍には少なくとも3隻存在する」

「しかし離陸……いや離艦というのか？　飛び立つにはあまりにも距離が短すぎるだろう」

「彼らは何らかの装置を利用し、飛び立つのに必要な速度まで強制的に加速させているようです」

「なんと！」

「マーティン元帥が勝つのは至難の技と仰っていましたが……私も同じ意見です。洋上で戦闘する場合、二ホン海軍には戦闘機による支援がある。我が海軍は空から、そして海上から圧倒的な戦力投射を受けるかたちとなるでしょう」

「さらに、彼らは水中から攻撃できる艦を保有している。未確認情報ですが、確かな筋から入手した情報です」

「水中からだと！？」

「それが事実なら、我々は手も足もでないままやられる。共和国海軍は指をくわえてそれを見守ることしかできん」

「元帥！　何か対抗案はないのか？」

「現在、ある工廠で建造中の巡洋艦があります。既に90%が完成しており、ミサイル戦の専門艦になる予定です」

「あれほど苦戦していた対空ミサイルが開発できたのか？」

「海軍工廠の連中は負けず嫌いでして……失敗に失敗を積み重ねた末にやっと誘導装置の開発に成功したのです」

「それは海軍工廠の独自開発か？ 信じられん」

「もちろん。ですが誘導できるのは一発だけです。そして発射母艦から目標への誘導波の照射を続ける必要がありますが……大部分は対艦ミサイルシステムからの流用というわけです」

「それでも海軍の戦闘能力が上がるではないか」

「で、そのミサイルの能力は？」

「小型のジェットエンジンを搭載しており、最大時速は1700 km/hにもなります。さらにはVT信管によって敵機に出血を強いることも可能です」

「それは戦闘機に転用できないのか？」

「現在の主力戦闘機TA 87に搭載するには大きすぎます。なんせ1500 kgもありますから」

「対艦ミサイルよりは小型だな。やつらは5000 kgで専ら艦載用だが」

「して、その巡洋艦のスペックは？ もう隠す必要もあるまい」

「まあ……そうですね。基準排水量は14000 t、全長200 m、全幅22 m、主砲は新開発の20 cm砲を4門、対艦ミサイルランチャーを6基、対空ミサイルランチャーは2基です。もちろん防御装甲もしっかりと」

会場がどよめく……海軍が極秘に開発していた対空ミサイルもそうだが、これだけの大型艦の存在が暴露され、その規模も共和国最大のものであったからだ。

だがそんな中でも少なからず疑いの声上がる。

「本当にそれで二ホン軍に対抗できるのか？ 聞くとところによれば、二ホンの軍艦は複数の対空目標相手に同時に攻撃できるものがあるようだ。いやそれだけじゃない、対空戦闘をやりながら対水上戦闘をもこなすやつらだ。そんな子供騙しみたいな巡洋艦で対抗できるとは思えん」

「アナト大佐！ 貴官はどこでそんな情報を！？」

「私の部下に優秀な人物がしまして、彼は二ホン軍主催の観艦式や火力演習まで見学に行ったらしい。そこで見た兵器はいずれも共和国軍のそれを凌駕するものばかりだと。質、量ともに強大な二ホン軍相手に戦争をするなら、我々はあと半世紀は待たねばならない。だがその間に二ホンも進化する……」

「結局は追い付けないということか……」

「だが後戻りはできない。とにかく次の作戦のために共和国領バリエラの軍港に艦隊を集結させる」

「北部のバリエラですか。二ホン軍もそこまでは察知できないでしょうな」

「三個艦隊をカール大陸方面に進出させる」

「目標は？」

「二ホン艦隊の撃滅です」

「そんなことでは海軍の損害が増えるだけだ。私は反対だな」

「しかし……ではどうすればよい？」

「私に良い考えがあります」

会議は終盤に差し掛かりつつあった……

バルアス共和国

タレス郊外

共和国海軍工廠

そこにはある軍艦が最終的な仕上げを施されるのを静かに待っていた。共和国初の対空ミサイルを装備し、名目上はセレス級の拡大発展型ではあるがそれを遥かに凌ぐ大型艦がドックにその巨体を鎮座させている。

対艦ミサイルランチャーは他のバルアス艦と同じく艦橋の両脇に配置され、それは太く巨大であり、その巨体と相まって一種の異様な雰囲気醸し出していた。

だが他の艦と明らかに違う部分があった……

艦橋と煙突の間に配置された2基の見慣れないミサイルランチャー……それが新開発の対空ミサイル。

「これがクローフトか。さすがに大きいな」

「大統領、早ければ来月にも就役できるでしょう。しかし戦力化はしばらく先になるでしょうな」

「それは仕方あるまい」

「ニホン海軍は強いと聞きましたが……このクローフトでも力不足ではないでしょうか？」

「ああ。そこはどうしようもない。むしろカール大陸侵攻自体が間違っていたのかもしれん。マーティン元帥、君はどう思う？」

「私は大陸侵攻が遅すぎたと考えます。ニホンが現れる前に侵攻しておけば、カール大陸は共和国の属領となっていたでしょう」

「なるほど、君の言う通りだな」

テルフェス・オルセンは日が落ちつつある夕刻の工廠で、ただ就役を待ち続ける巨艦の姿を眺めながら言った。

「ニホン陸軍は大陸に軍団規模の兵力を投じ、さらには大規模な艦隊をまとめて派遣するあたり……彼らの国力を疑ってしまいます」

「まだ見ぬニホンの真の姿か……一体どうすれば2億人もの人口を養えるというのだ？ 数百万にも及ぶ軍隊を抱えながらも彼らは国民一人一人が豊かだと聞く」

「人間は一定水準以上の生活ができれば豊かと言えるでしょう。我が共和国の百万にもなる貧困層がなぜ生まれたのか……それは国

民を皆公平に扱うという共和国の憲章に反した結果だと私は考えます」

「私より3代前の大統領……全ては彼が考案した大陸統一戦争から狂い始めた。まだ若い議員だった私はろくに反発することもできなかったな。かつては反戦を唱えていたが……30年で考え方で変わってしまうとは！」

「あの戦争……膨れ上がった戦費、戦後は戦死遺族への賠償、帰還兵の雇用問題……当時70万人に及ぶ兵士が退役後の雇用先が見つからず大問題となった。豊かになるものがある一方で貧しい生活へとひた走ることしかできないものもまた……」

「今回の戦いも負の遺産を多く産み出すだろう」

広島県呉市

呉海軍工廠

転移より遙か以前から数々の艦艇を産み出してきた帝国最大の呉海軍工廠……転移前は東洋最大と言われ、この世界に来てからはその規模に匹敵する工廠は無かった。

そこで整備を受ける一隻の軍艦がいた……それは帝国海軍の正規空母と同じように全通甲板とアングルドデッキを持ち、その艦体は巨大で圧倒的な存在感を誇る。

その名は『翔鶴』

本来なら第2空母戦闘群の一員である翔鶴は、訓練中に格納庫でミサイルの暴発事故が発生し、原因究明と修理が行われていたの

である。

「この調子なら来月には艦隊に復帰できるでしょうな。しかし原因が安全装置にあったとは……」

「あの爆発でエレベータが吹っ飛んだからな……」

「しかし死人が出なくて幸いですな。それに開放式格納庫のお陰で被害は極限できた」

「復帰後初任務は貨客船の護衛になりそうだ」

「もう仕事が決まってるんだな」

「艦隊に合流するにはタリアニアまで出向く必要があるからな。ついでに青葉と加古も一緒に行く予定だ」

「こりゃまた強力な巡洋艦の護衛付きとはな。タリアニアまで安心して旅ができそうだ」

二人の男は工廠の喧騒の中で話続けていた。

8月3日、遂に翔鶴が復帰することとなる……

第十九話

8月12日

鹿児島県沖200km

貨客船大洋丸

船橋では船長の大隈武保が陽光を吸い込み、キラキラと輝く海面を静かに見つめていた。

「船長、翔鶴より通信です。まもなく合流すること―!」

「右30度、船影見ゆ、翔鶴です!」

「来たか。それにしても……いつ見てもデカイな」

「これでタリアニアまでの旅路は安泰ですな」

マルセス・ダレイシスは甲板で寛いでいたが、右舷側が騒がしくなったのに気付き様子を見に行くことにした。

「一体何があつたというんだ?」

いくつかの通路を抜け右舷側甲板に歩み出ると、多くの人が手を振っているのが見えた。その先では空母と呼ばれる大型艦が今まさに合流を果たそうと近づいていた。

「これは……！」

マルセスは二ホンに空母があるということを今回の任務で知っていたが、実物を見るのはこれが初めてだった。この貨客船よりも巨大で重厚な艦体を持つその甲板には多数の戦闘機が並び、より一層の威圧感を感じさせる。

そして2隻の巡洋艦と思われる艦のうち1隻が、その俊足を活かしあつという間に船団の前に躍り出る……。それらは空母に比べれば遙かに小さく見えるが、それでも共和国の巡洋艦より大型で、その加速はその巨体に似合わず俊敏であった。

そして空母は貨客船と1km程の間隔を置き並進する。直後、後方よりジェットエンジンの奏でる爆音が響き渡る……

思わずその方向へ目を向けると2機の戦闘機が低空を高速で駆け抜ける場所であった。

「烈風だ！」

誰かが叫ぶのが聞こえたが、マルセスは突然の来客に驚愕することしかできない……。その戦闘機は共和国のTA 87より遙かに速く、そして力強かった。機体、エンジン音、機動力……。どれをとってもTA 87を優越しているように思われる。

「あんな戦闘機に勝てるわけがない……。装備が根本的に違う！」

マルセスは上昇へ転じる二ホンの戦闘機にただ圧倒され続けていた。

バルアス共和国南部
プレミアアノ市

首都タレスから車で4時間、海沿いの道をひたすら西へ向かえばプレミアアノ市の象徴である大聖堂が見えてくる。

古くからバルアス共和国の国教であるモレアン教の聖地として知られる人口6万人の小さな街だ。

しかし、そんなのどかな街にも戦争の影響はゆつくりと、だが確実に影を落としていた……

街では軍の担当官が戦死者の家庭に直接出向き、家族に訃報を伝えて回っている。

「マリー・ドレイク婦人、貴女の夫、ジャックス・ドレイク海軍中將の戦死認定が為されました。ここに詳細があります……心より御冥福をお祈りいたします」

そう言つと軍の担当官は封のされた包みを丁寧に渡し、そして去っていく。

その背中を見送つた後、渡された包みを見る……

「そんな……ジャックス！」

包みを開き、中の紙を取り出す。そこにはこう書かれていた。

『共和国海軍中將、ジャックス・ドレイクは、カール大陸西方沖海戦にて艦隊を指揮、当戦闘において旗艦セレスと運命を共にするものなり』

その文書と共に軍艦旗と、海軍の支給品である腕時計が添えられている。おそらく遺品なのであろう……

彼と出会ったのは統一戦争終戦後のことであつた。当時、戦後の混乱の最中であつた共和国も統一戦争の勝利を祝うムードが徐々に高まりつつあつた頃だ。

マリーの故郷であるプレミアノも例外ではなく、市街地では陸海空三軍の将兵によるパレードが行われ、プレミアノはこれまでにないほどの賑わいを見せた。

「若い軍人さんが来るんだって！ マリーも行こうよ」

そう言われて強制的に連れてこられた酒場……そこには紺の制服に身を包んだ海軍軍人が数人、丸テーブルを囲みポーカーに明け暮れていた。

「くそっ！ またジャックスに持っていかれたか」

「フェンレルの奴、俺達におごる約束だったのに……あいつは勝ちを全部持つて逝っちまった」

「あいつの乗艦してた駆逐艦は生存者が一人もいなかったな……爆発したと思つたら消えてたんだ」

「みんな、その話はもうやめよう」

「そうだな……ところで、あつちに女の子がたくさんいるぜ？」

「ワオ、とびきりの美人だぜ！　おいジャックス、お前誘ってこいよ！」

「なんで俺なんだ？」

「お前の勝ち分でおごつてやると言えば来てくれるかもよ」

「仕方ないな」

そう言つとジャックスは女たちの近くに歩み寄り、声を掛けようとするが……

「もしかして海軍の軍人さんですか！？」

女の方から声を掛けてきたことに多少驚きつつ、ジャックスも言葉を紡ぐ。

「あ、ああそうだよ。よかったら僕たちと飲まないかい？」

「勿論ですわ！　喜んで」

女たちは皆一様に明るく見えたが、その中に一人、物静かでおとなしそうな女がジャックスを凝視していた。

「あの……君、どうかしたのか？」

ジャックスは少し戸惑いながら問いかける。

「え？　いえ、なんでもありません！」

「あら、マリーはその軍人さんに一目惚れかしら？」

「ち、違うよ!」

友人のからかうような言葉に顔を真っ赤にして否定するマリー、それを見たジャックスは笑いをこらえるのに必死だった。

「マリーさん、僕に惚れてもいいことはありませんよ。軍人なんか選ばなくても、もっといい男がいるはずですよ」

「あの! お名前は？」

「ジャックス・ドレイクです。以後お見知りおきを」

二人が初めて出会った夜を思い出すと、少し落ち着いてきた。

「ジャックス、いいことはないって言ってたけど……まさかこうなるってことだったの？」

透き通るほど晴れ渡った青空を見上げるマリーの顔は、どこか清々しかった。

彼女は知らなかった。ジャックス・ドレイクが捕虜として生きていることを……

バルアス共和国
首都タレス
大統領宮殿

「急用とはなんだね？　デИБイス君」

「大統領、情報部がタリアニアであるものを見つけ、持ってきたのでご覧頂きたい」

「何を持ってきたんだ？」

「ニホンのテレビです。アナト大佐、例のものを」

情報部のアナト大佐は黒く薄っぺらい板のようなものを運んできた。

「大臣……私をからかうのはやめてくれ。これがテレビだと言うのか？　こんな薄っぺらじゃブラウン管も入ってなさそうだが」

「見ればわかります！　電源を借りますぞ」

そう言つと大臣は執務室のテレビの電源を引っこ抜き、代わりに薄っぺらな板から伸びるプラグを差し込む。

「アナト大佐、説明書を……むう、タリアニア語か、読めるか」

「はっ、どうやらここが電源……この黒く細長い箱は何だ……ほう、これで操作できると言つのか。では電源を入れますぞ！」

アナト大佐がリモコンの電源ボタンを押すと、画面にカラフルな縦縞が現れ、ピーという奇妙な音を響かせ始めた。

「なんだこれは？　共和国の国営放送は映らんのか？」

「大統領、もうひとつブルーレイなるものを入手しております。これをここに入れば、このテレビで映像を楽しめるようです」

「こんな円盤で映像が見れるだと？ とんだ夢物語だな」

「アナト大佐、タリアニア語が読めるのは貴官しかない。なんとか映像を見れるようにするんだ！」

デビスが必死の形相でアナトに迫る。

「大臣……近すぎです。心配せずとも見れます」

「ちなみにこの円盤には何が書いてある？」

「核？ 実験の記録映像……そう書かれてますが。どうやら反戦を謳ったもののようです」

2時間後……

「アナト大佐、時間掛かりすぎだ」

「申し訳ない、大臣……これで見れるはずです」

「その言葉、この日何度目になるだろうな」

大統領が皮肉っぽく笑いながら言う。

が、唐突にカラフルな画面は消え、何かの文字が画面に浮かび上がる。

「おお、映ったぞ！」

「大佐！ 画面の文字を訳すんだ」

「了解しました！」

『我が国の核武装 この映像は1968年、アメリカ合衆国の実験場で行われた 20メガトン級水素爆弾の爆発時の映像である』

直後、画面の中は眩い光に覆われ、発光の後遠方で巨大な火球が生まれていることにデイスは気付く。

その後、炎を纏った太い黒煙が天高く立ち上り、そのてっぺんはキノコを思わせるがどこか、けばけばしさを感じさせた。

その周りの雲は衝撃波で周囲に均等に広がっていく……それは一種の芸術と見紛うほど……

「なんという……ニホン人はなんという恐ろしいものを」

「大統領、これは彼らの最終兵器です。それも、同じような兵器で攻撃を受けた際の報復手段……」

第二十話

8月16日

大日本帝国

沖縄県嘉手納

太平洋戦争における重要拠点の一つと見られていた沖縄は、アメリカ軍の作戦が頓挫したことで戦場になることはなかった。

マリアナ沖海戦でアメリカ海軍は多大な損害を受け、残存艦隊はマーシャル諸島へ撤退する。マリアナでの帝国の勝利は、ミッドウェー海戦以降の不利な情勢を一気に覆すことになった。

現在では空軍の第5航空団が置かれており、転移前より極東の重要基地としてアジア全域に睨みを利かせていた。

広大な敷地には空軍主力戦闘機、F 15が多数並び、カール大陸に向けて飛び立つ日を待ちわびているように思える。カール大陸では既に空軍の航空団を受け入れられる大規模な飛行場が完成しており、帝国は空軍部隊を順次派遣する予定だ。

空軍の戦闘機、F 15は度重なる近代化改修によって長きに渡り空軍の主力に居座り続けていた。

航空団司令の松沢幸弘少将は空軍の薄いブルーの開襟シャツをだらしなく着こなし、彼がかつて粹のイーグルドライバーだったことをその様子から想像できる者はこの基地にいなかった。

松沢は、統合司令部から届いた電報を読みながらコーヒーを飲んでいる。

「カール大陸方面に進出だつて？　本気かよ……吉村大尉、
どうやら我々にもお仕事が来たようだ」

どこか冴えない、髪がボサボサの男が松沢を見る。

「お仕事ですか？　一体何の……」

「楽しい楽しい遠足だ。聞いて驚くなよ？」

「閣下、焦らさんでください。で、どこなんです？」

「カール大陸だ」

「あーなるほど、カール大陸ですか……本気ですか！？」

「これを見る、遂にカール大陸に進出だ！　海軍さんや陸軍
さんに迷惑を掛けないよう気を付けろ」

「やつとイーグルに活躍の場が与えられたんですね！」

「やつとだ。空軍の連中はみんなウズウズしてるだろうな。今
じゃ領空侵犯する国もないしスクランブルは全く無い」

「本当ですよ。元教導隊の私としても久しぶりに暴りたいです
な」

「大尉はたしか築城にいたんだな。あそこの連中は正直人間と
は思えなかったよ」

「ですが海軍飛行隊も恐ろしい奴らが揃ってますよ。奴らと合
同演習をしたアメさんのパイロットは嫌がって来なくなつたとか聞

きました」

「あいつら……ドッグファイトの強さは半端じゃないな」

「バルアス共和国の戦闘機はミサイルを持たず、格闘戦重視だとか」

「ああ。写真を見たが……メッサーシュミットの古い戦闘機によく似ている。ロケット弾と機関砲が主武装らしい」

松沢は窓の外に見えるF 15の精悍な姿を見やる 世界最強、実戦での被撃墜ゼロ

アビオニクスが一新され最新の電子機器を搭載し、進化を続ける空中戦に対応してきたがやはり、次々と現れる中国やロシアの新鋭機に対しては力不足とも言われていた。

そこで空軍はF/A 18、タイフーンの導入、もしくは開発中の国産ステルス戦闘機導入を検討し、最終的に国産機導入に落ち着くこととなった。

第5航空団には10機配備されたものの転移により機種更新は進まず、未だに主力の座にF 15が居座り続けている。

数少ない新鋭機、疾風は国産初のステルス機であり、アメリカ空軍のF 22に匹敵する性能を持つと言われていた。

実際、F 15との模擬空戦で125戦無敗、海軍の烈風には87戦無敗で、現在に至るまで記録を更新し続けている。

転移直前の平成22年から就役を開始し、最終的に200機が

調達予定ではあったが、転移による脅威の消失等の理由で70機の調達にとどめられている。

「疾風も持っていくのでしょうか？」

「そうだろうな」

その頃上空では、1機の疾風が2機のF 15を相手に模擬空戦を繰り広げていた。

その疾風のコックピットには1人の男……

「防空隊司令部よりハゲタカ01へ、方位3 2 7より2機の不明機が侵入。直ちに対処せよ」

普天間に置かれた防空隊司令部要員の無機質な声を聞きながら操縦桿を傾ける西岡一馬大尉。疾風の運動性能は良好だ……ほんの少し操縦桿を傾げるだけで機は即座に思い通りに反応してくれる。そして推力偏向ノズルの採用やスパークルズ能力など、従来の戦闘機を凌駕する性能を獲得するに至った。

「ハゲタカ01了解」

西岡は落ち着いた声音で返答する。乗り替えて既に3年、自分の体の一部と言っても過言ではないくらいに乗りこなせる。

今日の相手は第5航空団でも屈指のパイロットで、F 15に10年以上乗り続けてきたベテランだった。彼とは同期の仲であり、空軍入隊当時から18年間同じ釜の飯を食ってきた仲でもある。

「森本の奴、三人目が産まれるって言ってたな。帰ったらお祝いでもしてやるか」

そのとき唐突に鳴り響くアラート音……それはレーダー照射を受けていることを表す音だった。そしてそれが、帝国海軍巡洋艦の搭載する強力なレーダー波によるものとすぐに気付く。ステルス機でも、巡洋艦の搭載するSPY 8Dの目から逃れるのは困難だと痛感する瞬間である。

「海軍さんはおつかないねえ。レーダーが強力すぎる」

西岡は感慨深げに呟く。帝国海軍は大型艦に、アメリカ海軍と開発した強力なSPY 8Dと呼ばれるレーダーを搭載しており、その探知能力と目標追尾能力は艦載用レーダーとしては世界最高水準であった。

戦闘機用レーダーと違って大型で出力も桁違いのSPY 8Dは、ステルス機と呼ばれるものですら忽ちのうちに探知してしまう。

「防空隊司令部よりハゲタカ01、不明機は貴機より120km北西、低空を飛行中、すぐに捕捉し撃破せよ」

きたっ

西岡は胸が踊り出すような気分だった。疾風のレーダーは既に2機の『敵機』を捕捉、空対空誘導弾のシーカーはそれらをロックオンしたことを示す赤色に変わっている。

向こうはまったく気付いた気配もない。

西岡は発射スイッチを軽く押した……実戦なら、開いたウエポ

ンベイから2発の誘導弾が飛び出し高速で敵機に向かう。

「イヌワシ01、02、貴機は撃墜された」

今日も疾風の無敗記録は更新された。

カール大陸北部
ゲロビーチ付近

暗い洞窟に逃げ込んでもう何日経ったか分からなくなっていた。ニホン軍の大規模な部隊が北上し味方の前線はすぐに崩壊、撤退を余儀なくされる状態だった。

ギリス・マレヌス伍長は敵弾を受け、重症を負ったヒースランド軍曹を担ぎ近くにあった洞窟に逃げ込む。幸いなことに、入り口が死角になっていたその洞窟は、未だにニホン軍に察知されていない。

「伍長……戦闘は終わったのか……私の部下は」

「外はすっかり静かになっています。部下は……」

「言わんでいい……死んだんだな」

「軍曹、無理して喋らないでください。ちゃんとした治療を受けるまで生きるんです」

「もう長くない……自分でも分かるんだ。伍長、投降しろ」

「しかし……軍曹はどうするのです!？」

「私の拳銃があつたはずだ。置いていけ」

「だめです軍曹!　二ホン軍が助けしてくれるはずです。私がここまで連れてきます」

「仕方ないな。許可しよう」

「すぐに戻ります!」

そう言つとマレヌスは洞窟を飛び出し、出来る限り走り続けた。数分もしないうちに二ホン軍の詰所らしき場所が見えてくる……

「止まれ!　何者か!？」

声のした方を見ると、斑模様の野戦服にヘルメット姿の二ホン兵が自動小銃をこちらに向けて立っていた。

マレヌスは立ち止まり、両手を上げて抵抗の意思が無いことを示す。いつの間にか周囲には重装備の二ホン兵十数人が集まり、こちらを静かに見つめている。

「銃を下ろせ、こいつを調べろ、武器を持っているかもしれん」

数人の屈強な二ホン兵が近付いてくる……

「小隊長、何も持ってません」

「よし、連れていけ」

「待ってくれ!　洞窟で仲間が助けを待ってるんだ!　助

けてくれ」

「何？ そいつは動けないのか？」

「重症で動けない……」

「案内しろ。私が行く。それからお前とお前と……あと衛生兵、一緒に来い」

小隊長と呼ばれた男はすぐに要員を手配すると、マレヌスと洞窟へ向かって歩き始める……先程の鋭い眼光は既に影を潜めていた。

第二十一話

8月16日

カール大陸北部

「軍曹！ 助けに来ましたよ！」

マレヌスは洞窟に足を踏み入れるとすぐに大声で叫ぶ。

「伍長か……」

「衛生兵！ 彼を見てやれ」

ニホン兵……もといシモムラ少尉が連れてきた衛生兵に向かって叫ぶと、すぐにヒースランド軍曹の横たわる場所へ駆け寄る。

「怪我の具合はどうか？」

「弾が腹部を貫通しており、出血が多いです。輸血が必要です」
「よう」

「あなたは？」

「日本陸軍少尉の下村だ、君には今から我々の救護所で治療を受けてもらう」

「バルアス陸軍のヒースランド軍曹です。感謝します」

「楽しんでくれ。おい、お前、本部にへりの要請だ」

「了解！　　すぐに要請します」

その様子を見ていたヒースランド軍曹は静かに目を閉じた。

「軍曹！」

「眠っているだけです。心配いりません」

カール大陸南部

タリアニア

捕虜収容所

広大な敷地、高いフェンス、有刺鉄線……そこは大陸北部での戦闘で大量に確保した捕虜を収容するために設営された捕虜収容所。そのような目的で設営されたにもかかわらず、白い画一的な建物が見渡す限り並んでおり、一種の住宅街にも似た雰囲気すら醸し出している。

トリアス・ローセン少尉は、いつものように運動場でランニングをしながら汗を流していた。

「ここの生活も悪くない」

海軍の誰かがそう言ったのを思い出す……

「確かに。こういう生活も悪くないか……ん？」

トリアスは収容所に隣接するかたちで設営された広大な敷地に目をやる。ジェットエンジンの爆音を轟かせて飛来したのは見たこともない巨大な航空機であった。

それは高翼配置で8発のエンジンをぶら下げており、太い胴体からして爆撃機であるとトリアスは予想する。

「なんて大きさだ。共和国の爆撃機は未だにレシプロ機だつていうのに」

トリアスの予想通り、それらは日本本土から飛来した52式重爆撃機の編隊であった。

「なんてことだ！ あんなにたくさん……神よ！」

トリアスはその巨体だけでなく、次から次へと着陸態勢に入る大型爆撃機の群れに驚愕を隠せない。

大日本帝国空軍第2爆撃航空団の52式重爆50機は、厚木飛行場から約8時間の飛行を経て漸く任地に集結を果たそうとしていた。

「こちらタリアニア管制、歓迎する。四番滑走路に着陸せよ」

「お出迎え感謝する。四番了解、これより着陸態勢に入る！」

第2爆撃航空団第3爆撃中隊7番機機長の林原治大尉は眼下に広がる広大な飛行場に目を奪われる……指示された四番滑走路は全長4500mにも及ぶ長大なもので、これなら悠々と着陸できるはずだ。

「またえらいもん作っちゃったな。500機収容つてのもあながち嘘じゃあるまい」

どこまでも広がる荒野を整地し、そこに切り開かれた巨大な飛行場は対バルアス戦の長期化に備え、空軍部隊を駐屯させるためのものだった。

そしてひっきりなしに飛来する輸送機を受け入れるにはタリアニアの空港は狭すぎたため、それらに対処するものでもある。

「おい！ トリアス！ 聞いてんのか？」

「あ、ああ。すまん」

「あれは一体何事だ？」

「どうやら爆撃機部隊のようだ。ニホンの本土から来たんだろ」

「ニホン本土だって？ 4000km以上離れてるんじゃないのか……」

「おそらく、あの機体の航続距離はその距離を余裕で飛行できるくらい長い」

「おいおい本気が……そんな化け物まで持つてるのかよ」

8月20日

バルアス共和国

首都タレス

『平成26年の新春を飾る陸軍始観兵式は、天皇陛下の親臨を仰ぎ奉り、1月10日皇居前広場において執り行われました。武勲輝く軍旗を先頭に、皇軍の精鋭は堂々の分列行進を行う』

バサッ

「はあはあ、またあの夢か……どうもあの映像が頭から離れん」

議員宿舎のベッドから飛び起きたダレン・ディビス防衛大臣は、先日見たニホンに関する映像 平成26年陸軍始観兵式 と題されたテープを手取る。

そのテープは情報部がタリアニアで入手したもので、ニホン陸軍の行進の様子が収録されていた。

「まだ3時じゃないか、くそっ！ ここ数日同じ夢ばかりだ」

「大臣！ バルデラ島より報告、カール大陸方面より不明機多数が接近！ 迎撃不可能な高高度を飛行中の模様」

「なんだと！？ 直ちに空軍司令部へ連絡！ 対空部隊に迎撃準備をさせろ」

そう言つとダレンは大統領宮殿直通の電話を取る……
《こんな時間に何事だ？ 会議はまだ早いぞ》

「大統領大変です！　二ホン空軍が接近しています、現在バルデラ島上空を通過した模様！」

《何っ！　迎撃はどうなっておる！？》

「それが……迎撃できない高度を」

《なんとということだ！　すぐに地下司令部へ移動しよう、君も早く来い》

「すぐ向かいます！」

バルアス共和国領海上空

「まもなくタレス上空、例の物の準備完了」

52式重爆機内では男たちがある準備を続けていた……巨大な爆弾倉の一角、そこに置かれた長さ3m、重さ2tの訓練用模擬爆弾は、大統領宮殿の広大な庭園に投下される予定だ。

「目標位置入力よし、誘導装置異常なし……投下準備よし、爆弾倉開け」

「投下10秒前……4、3、2、1、投下！」

テルフェス・オルセンは大統領宮殿庭園で、上空から複数の何かが落下してくるのを見つめていた。そしてそれが爆弾だと気付いたときには、全速力で地下司令部へ走り始める。

「なんてことだ！　二ホン軍め、もう爆撃に来るとは」

ヒューーと不気味な風切り音を響かせながら巨大な何かが近くに着弾する。

「もう終わりだあ！」

大統領はその場で腰を抜き、動けなくなってしまっ……

「大統領！　何をしてるんです！？　早く地下へ」

「す、すまん。しかし何も起こらないな？」

「遅延信管かもしれません。とりあえず地下へ行きましょう」

その間にも巨大な謎の物体は周囲に着弾し続けていた。

「二ホン軍航空部隊は中部セレス地区上空でプレミアノ方面へ変針、そのままカール大陸へ向かうものと思われます……」

「カール大陸からセレス地区までは何キロある？」

「約4500kmです」

「それが何を意味するか分かりますか？」

「というと……そんな馬鹿な！　少なく見積もっても敵機の航続距離は10000kmはある！？」

「マーロー大佐、そんなことが信じられるか？　我が共和国のベルセス22爆撃機ですら航続距離4500kmなんだぞ？」

「レムルス少将……私も信じられません。しかし、ここまで常識はずれなものを見せられては信じるしかありません」

タレス空軍基地司令のジョン・マーローは、首都防空隊司令部のレムルス少将に力なく言い放つ。

「たしかにな……しかし投下したのが模擬爆弾とは。我々を脅すつもりだったのだろう」

「私もそう思います。市民は空からの恐怖に怯えています……」

「ニホン軍は好きなときに好きな場所を攻撃できると……とんでもない奴らだ」

「早急に対策が必要です。閣下、なんとか首都防空隊の戦力補充はできないでしょうか？」

「難しいかもしれませんが……上層部に掛け合ってみよう」

基地作戦室の空気は重く、そこに集まった空軍幹部たちに緊張を強いていた。

8月22日

カール大陸南部

タリアニア

マルセス・ダレイシスはこの日、軍港近くのカフェで一人コーヒーを飲んでいた。そして彼はある人物と待ち合わせをしていた……その人物の名は『アンドウ』、潜伏拠点であるアパートに届いた封書……そこに書かれていた名前だ。

「戻ってきたら早速厄介な！ アンドウ……何者だ」

マルセスはアンドウが指定した一番右奥の座席に座っていたが、不思議なことにその周囲には誰一人として客の姿がない。それが一層マルセスの警戒心を煽る。

「いらつしやいませ」

店主の声で何気なく入口の方を見る……そこには帯青茶褐色の軍装に身を包んだ二ホン陸軍将校の姿があった。

「まさかな」

マルセスは向き直ると再びコーヒーに口をつけようとする。

「相席してもよろしいかな？」 顔をあげると先程の将校の姿……その身長はマルセスより高く、軍人らしいガッチリとした体躯を軍服の下に隠していることは明確であった。

「あなたがアンドウ氏か？」

「察しがいいな。私は帝国陸軍情報部大佐、ジェームス・安藤だ。よろしく」

「なぜニホンの将校さんがこんなところに？」

「君こそどうしてこんなところにいるのかな？　バルアス共和国の諜報員なんだろう？」

「……」

「なに、私は君を捕まえるつもりはない。話がしたいんだ」

「そうなのか？　どうしてわかった？」

「少し調べさせてもらった。最近日本へ行っただろ？　君の身分証はICチップが読み取りできないと連絡があつてね」

「ICチップとはなんのことだ」

「小型の記憶媒体とでも思ってくれ」

「まさか！？　こんなに薄い記憶媒体があるのか？」

「バルアス共和国にはないのか？　我が国では常識だから」

「そんな小さい記憶媒体など聞いたことがない！」

「その話は置いておこう。身分証の件は私が部下に処理させて

おいた」

「なるほどな……ではなぜ呼び出した？」

「私はバルアス人と話がしたくてね。今はあいにく戦時だが、良き友人になれるはずだ」

「友人か……ところで、あなたは他の二ホン人とは違うようだが？」

「私の母はアメリカ人でね、多分にアメリカ人の血が流れている」

「そうか、アメリカとはどんな国なんだ？」

「アメリカか？　そうだな、とにかく大きい国だ。元の世界に戻るものなら案内してやりたいよ」

「バルアス共和国や二ホンよりも大きいのか？」

「遥かに大きいだろうな。そして広大で自由な国だ。母はペンシルベニア州の出身なんだ、私もフィラデルフィアの街で育った」

「そうか。二ホンのいた元の世界とはどんな世界だったんだ？」

「比較的平和な世界と言えるだろう。だが人と人との争いは絶えることはない。世界規模の大戦は起きていないが、大日本帝国の消えた世界……何かが起きているかもしれない」

そう言つと安藤は立ち上がる。

「今日はこの辺りで失礼するよ。また会おう」

第二十二話

8月25日

大日本帝国

広島県広島市

古くから軍都として栄え、陸軍第5師団の本拠地であり、現在も30個師団約60万人を擁する西日本総軍の総司令部が置かれている。

広島城の周辺には軍関係の施設が多く建ち並び、軍都としての様相を更に際立たせていた。

その一角、歩兵第11連隊……

「貴様ら！ それではバルアス兵にやられるぞ！ もっと気合入れて走れ！」

竹刀を持った古参軍曹の怒鳴り声が聞こえる。

「はいっ！」

練兵場で小銃を持ち、30kgにも及ぶ個人装備を装着して走る男達。

59式小銃に比べれば軽くなったとはいえ、89式小銃は約4600g……諸外国の自動小銃に比べるとやや重く、その上使用する弾丸は7.7x58mmの59式実包である。

かつて前世界で5.56mm弾の採用が加速する中、帝国は太

平洋戦争時に使用していたものとほとんど変わらない弾丸を使用していた。

当初は反動が強く、取り回しにくいと不評だった89式小銃だが、ひとたびその取り扱いに慣れれば、安定した弾道特性と相まって驚異の命中率を誇る銃でもあった。そしてその性能は戦場で安心して使えるものであり、イラク派遣においては各国の兵士から高い評価を受けている。

10km程走っただろうか……普段から鍛えているとはいえ、フル装備で走るのは楽ではない。

小銃はただ重く、装具の重量は肩にずしりとのし掛かり、走る男達の疲労に拍車をかけていた。

梨田照夫二等兵もその一人であり、走る集団の一部であった。

「小休止五分!」

「軍曹殿! どうしてこんなに走らなければならないのですか?」

「馬鹿者! 戦場ではそんな口は聞けんぞ!」

「はっ! 申し訳ありません」

「罰として腕立て20!」

「ええー!?!」

「梨田勘弁してくれ」

「マジかよ」

「貴様らさっさとやらんか！」

バルアス共和国

バルデラ島南方沖

約800km

駆逐艦浜風は僚艦の巻波、大波、巡洋艦足柄と共に哨戒活動を行っていた。

彼らから東へ400kmの地点では大和を中心とした艦隊が進出しており、バルアス共和国への監視網は日に日に増強されている。

駆逐艦浜風は、平成6年から帝国海軍の汎用駆逐艦として大量に建造されたうちの1隻であり、現在の駆逐艦は全て同型艦である。全長152m、基準排水量4000tの艦体は駆逐艦としては大型で、帝国海軍の外征能力を更に向上することとなった。

そしてそれら駆逐艦隊のまとめ約として随伴する巡洋艦足柄は、金剛型巡洋艦の次級として建造された高雄型巡洋艦6番艦だ。

ここ数十年、帝国海軍の各艦型は集約され一纏めにされる傾向にある。高雄型もそのひとつであった。

足柄は基準排水量18000tを誇る巨体を海に浮かべ、ゆっくりとした速度で進んでいた。

その姿は戦艦を連想させるほど巨大で、全長だけなら長門と同等である。艦橋は艦隊司令の座乗を考慮した結果、前級の金剛型よりも高く巨大で威圧的なものとなった。

ジェーン年鑑においては巡洋戦艦に分類されるなど、その秘めたる戦闘力は仮想敵国の中国やロシアなどから脅威と位置付けられ、帝国やアメリカを中心とした海軍軍縮会議の開催を訴えるほど騒がれた。

だが、帝国が転移したことにより軍縮は行われることはなかった。

「足柄より入電、電探が北方より航行中の船舶を捕捉！　これより接近する、我に続け！」

足柄は艦首を北に向け、艦隊の先頭に躍り出る。それを見た浜風以下3隻の駆逐艦は直ちに足柄の後方に移動し、短時間のうちに見事な単縦陣がそこに現れた。

バルデラ島南方沖
約670km

バルアス共和国海軍偽装偵察艦バルタードは速力13ktで南下していた。

その目的はカール大陸周辺の敵情把握である。

見た目は貨物船を模したもので、外から見ただけならただの商船にしか見えないだろう。そしてタリアニアの所属であることを示す国旗まで掲げられ、完璧な偽装であると思われていた。

「艦長、先程より通信装置がノイズを拾いはじめました。おそ

らく……強力な通信によるものと」

ゼラン・マネス少佐は部下の報告に耳を傾け、ほぼ一瞬にして答えを導き出す。

「二ホン艦隊だな。もし近くに来ても努めて冷静に対処しろ。下手な真似をすればすぐに沈められるだろう」

「了解、ですがレーダーは未だに二ホン艦隊を捕捉しておりません」

「そのうち捕捉するさ。あくまでも我々は商船だ。堂々と振る舞えばいい」

「艦長、私は嫌な予感がします。カール大陸にいる情報部員は二ホン海軍の戦闘艦を多数目撃しているようです。中でもヤマトと呼ばれる艦は圧倒的な戦闘力を持っているとか」

「それなら私も聞いたな。しかし……何が目的であんな巨艦を？ 未だに存在を信じることができないんだ」

「艦長もですか？ 私も嘘だと信じたいです」

「ああ。あんなもの相手にしたら共和国海軍の巡洋艦が玩具に成り下がってしまうだろう」

「もし……我々の前に現れたなら、武装が機銃程度の偵察艦では相手にできないでしょうな」

「出会わないことを祈ってるよ」

「仰る通りです」

数時間後……足柄を先頭に速力20ktで北上する艦隊は、遂に水平線上に船を発見した。

「足柄より入電。船舶視認、接近を継続する」

浜風艦長の須原中佐はその方向に双眼鏡を向ける。

「貨物船か？」

「艦長、足柄からです。接近中の船舶はタリアニア船籍の貨物船なり」

「おかしいな。あの船は決められた航路を大幅に逸脱してるぞ。足柄に伝える！ 敵偽装船舶のおそれありだ」

「りよ……了解！」

「艦長！ CICより報告、バルアス軍機と思われる航空機40機、330度、距離200！」

「なんだと！？」

「さらに290度より110機が接近！ その後方から30機」

「空母の飛行隊ではないのか？」

「識別信号に応答ありません。敵機です」

「大和より入電！ 敵機多数が接近中、直ちに待避されたいし

！」

「足柄は！？」

「足柄、転舵します」

「足柄に続け！ とーりかーじ」

バルデラ島南方
700km上空

バルアス共和国空軍第9爆撃団のベルセス22爆撃機40機は、偽装偵察艦に近づいてくるであろう二ホン艦隊を攻撃するのが今回の任務であった。他には30機の予備部隊も出撃しており、こちらはTA 87の集団後方を飛行中だ。この作戦は首都近郊の空軍部隊のほぼ全力であり、二ホン艦隊に損害を与えるのが絶対の達成条件だった。

レーダー員のズコフ・ローマン少尉は、四角いレーダー画面を凝視し、その波形が一際大きい反応を示すと同時に機長のロスレス少佐に報告する。

「機長、水上目標探知！ 距離近い！ まもなく目視でき

るか」と

「右方向に航跡視認、1隻だけか？　　ありゃバルタードだな」

「雲が多いな。高度を下げよう」

ロスレスは操縦桿を前に倒す……ベルセス22はレシプロ4発の大型爆撃機で、その動きは鈍重だが最大搭載量10tを誇り、多数の爆弾を敵の頭上に落とすことができる。今日は半分の5tしかないが、ニホン艦隊には確実に損害を与えられると思われていた。

「ニホン艦隊はまだ見えないか？」

「今のところ見当たりませんな……ん？　　機長！　　ミサイル接近！　　回避してください」

「なんだと！」

「四番機やられました！　　六番機も……」

「ニホン艦隊の対空ミサイルか！？　　高度を下げる！　　リーダーに捕まるぞ」

「さらにミサイル多数が接近！　　数20以上！」

「くそっ！」

巡洋艦足柄CIC

「第一目標群、40機撃墜。第二目標群、艦隊防空圏に到達！」

「数が多いな。今の対空誘導弾の残数では足りんな」

砲雷長の別府憲広少佐はモニターに表示された残弾数を見て顔をしかめる。

VLS126セルのうち、対空誘導弾は96、アスロック4、トマホーク26である。40発を消費した今となつては、残り56発の対空誘導弾と駆逐艦3隻のシースパローしか迎撃手段がない。

「艦長、このままでは敵機の接近を許してしまいます」

「うむ、まずいことになったな。空母戦闘群は1000kmも離れている……間に合わない」

艦長の吉井修吾大佐はこの状況でも焦った様子ひとつない。

「艦長、防空巡洋艦羽黒より入電！ 本艦、これより対空戦闘を開始するものなり」

「来たか！ これで少しは戦えるだろう」

足柄より40km南方

防空巡洋艦羽黒

全長225m、全幅31m、基準排水量23500tのダークグレーの巨体を海に浮かべ、最大戦速で北上する姿は戦艦そのもの

と言えるかもしれない。

1985年に就役した羽黒は大型巡洋艦として設計開発され、当時既に陳腐化していた三連装主砲を四基も装備していた。

そして海面から30mもある塔型の艦橋はステルス性を完全に無視していたが、その艦影はまさに戦艦の再来と言えるだろう。

しかしいささか時代遅れだったこの艦は1997年、遂に大改装工事を受けることになる。

見た目だけなら威圧感十分の三連装主砲、高い塔型の艦橋等上部構造物のほとんどが撤去、代わりにVLS136セル、連装主砲二基、20mm高性能機関砲四基が装備され、艦橋も高雄型とほぼ同一のデザインとなった。

防空巡洋艦羽黒は、SPYリーダーと高度に自動化された対空戦闘システムによって、圧倒的な防空戦闘能力を持つこととなる。

「足柄と連携して対空戦闘を行う、全機叩き落としてやれ！」

「第二目標群、まもなく射程に入ります！」

「VLS1番から18番、目標データ入力完了！」

「1番から18番発射はじめ！ 続けて19番から30番データ入力！」

同時多目標対処……近年の帝国海軍巡洋艦では当たり前となった能力だ。高雄型で12目標、羽黒だと最大20目標と言われている。

だがいくら同時対処が可能とはいえ、それは連携して初めて活

かされる。

足柄も羽黒がいなければ数の暴力で押しきられていたかもしれない。

足柄CIC

「羽黒、対空誘導弾18発射！」

「よし、我々も対空戦闘を継続する！」

「羽黒の誘導弾全弾命中！」

「第二目標群の一部、個艦防空圏に到達！ 浜風、巻波、大波、シースパロー発射します！ 羽黒、第二射発射しました」

「敵第二目標群残り80！」

バルアス共和国空軍

戦闘機部隊

「爆撃機団からの通信途絶！ 撃墜されたものと思われます」

複座型のTA 87を駆る編隊長のデガス・マレスティ中佐は後席のヤレン大尉の報告を静かに聞いていた。

既に味方機70機を失ったことへの驚愕も大きいですが、それより

も二ホン艦隊の防空力に驚かされる。

「二ホン軍め！　　いったいどんな魔法を使いやがった」

マレスティは必死に冷静さを保とうとしていたが、前方から迫り来る多数のミサイルの姿を見出し、慌てて指示を出す。

「全機散開！　　生き残れえ！」

そう言つと操縦桿を一気に傾け急旋回に入る。急激に襲い来るGに必死に耐える……その視界に空振りに終わった敵ミサイルが見えた。

「ざまあ見やがれ！　　ミサイルも当たらなければ脅威ではない」

「中佐！　　ミサイルが反転して追いかけてきます！」

「なに！？」

マレスティは後ろを振り返り、ミサイルの姿を探す。
見えた！

「大尉！　　脱出だ！」

「了解！」

直後、キャノピーが吹き飛び、座席が圧縮空気により上空へ射出される。

その数秒後、ミサイルは先程まで搭乗していた戦闘機を粉々に吹き飛ばした……

番外編――帝国の消えた世界――

2014年8月10日

アメリカ合衆国

ワシントンD.C

トニー・フランク米大統領はホワイトハウスの執務室で何者かと電話会談を行っていた。

「シユナイダー総統、今後の世界情勢を安定させるためにもドイツの協力は必要不可欠だ。たしかに我々は西側の強国かもしれないが、日本が消えてからロシアや中国の態度が急変している」

「たしかに。日本という強国の存在が彼らを抑え込んでいたのは間違いないですな。しかし、中国の朝鮮半島への侵略計画……いったいどこからそんな情報が？」

「合衆国の情報網は全世界に緻密に張り巡らされている」

「アメリカとしては朝鮮半島の赤化を防ぎたいと？」 「その通りだ。韓国軍は強い。しかし中国、ロシアとの圧倒的戦力差は簡単には埋められない。何より……同盟国を何も手を貸さず見捨てたと言われている合衆国の威信は保てないだろう」

「たしかに大統領の仰るとおりですな。韓国軍は日本が育成した優秀な軍人が多い。少なくともアメリカが参戦するまで持ちこたえるでしょう」

「イギリスには話は通してある。来月にはロイヤルネイビーが艦隊を日本海に……いや、太平洋に派遣するらしい。我が合衆国海軍も第3艦隊を派遣する。幸いにもマリアナ諸島やフィリピンは我が軍の受け入れを快諾してくれた」

「第3艦隊！？ 空母を大小合わせて10隻抱える大艦隊を派遣するとは穏やかじゃありませんな」

「ドイツ陸軍の力も借りたい。1ヶ月後、それまでに答えを教えてください」

「では、それまでに答えを出しておきましょう」

カリフォルニア州

サンディエゴ海軍基地

サンディエゴはアメリカ西海岸における海軍の主要基地で、第3艦隊の司令部もここに置かれている。

フィラデルフィア海軍工廠で再就役のための工事を受けていたモンタナ級戦艦BB 67モンタナをはじめ、オハイオ、ニューハンプシャー、ルイジアナ、メインの5隻が集結していた。

太平洋戦争終結後、日本海軍の大和型戦艦に衝撃を受けたアメリカは中断されていたモンタナ級の建造を再開。1950年によろやく全艦が就役した。

戦後、いわゆる大和ショックなる影響をアメリカにもたらし、中止されていたモンタナ級の計画が見直されたためである。

その設計は若干の変更が加えられることとなった。

モンタナ級戦艦要目

全長：280.9 m

全幅：38 m

基準排水量：64500 t 満載排水量：74000 t

最大速力：27 kt

主砲：50口径16 in

3連装4基

その他、トマホーク4連装装甲ランチャー8基

ハーブーン4連装ランチャー6基

フアリンクスCIWS4基等

アメリカが多額の建造費を注ぎ込み完成したモンタナは世界中を驚愕させた。その排水量は大和型戦艦と同等、主砲口径こそ劣るものの大威力を誇る16 inのSHSは、大和の45口径46 cm砲にも負けず劣らず強力なものだ。

それら事実を知らされた帝国海軍関係者は震え上がったという。そんな戦艦が5隻もあるということに。

「おおー、こいつがモンタナか！ 噂には聞いていたがなんてデカさだ。ニミッツ級にも負けちゃいないな」

モンタナ級を初めて見た若い水兵は感嘆の声を上げる。近くに停泊するニミッツ級空母と比べれば全体的に低い乾舷の影響が小ぢんまりと見えてしまう。

しかしそれが駆逐艦や巡洋艦と並ぶと話は別だ。

威圧的な3連装主砲、高い塔型の艦橋構造物、幅広の艦体等、大型戦闘艦と呼ばれるタイコンデロガ級やアーレイバーク級が全て小型艦にしか見えなくなってしまう。

「君はモンタナ級を初めて見たのか？」

「て、提督！」

「堅苦しいのはいらん。楽にしろ」

合衆国海軍のカーキ色の服に身を包んだスキンヘッドの男は、慌てて敬礼する水兵にそう言う横に並びモンタナの雄姿を見上げる。

「湾岸戦争以来か……これこそ海の王者に相応しい！」

第3艦隊司令官のマーク・ウィリアムズ中將は誰にも見られないように笑った。隣の水兵にすら気付かれないように……

「司令、海軍作戦本部長からお電話です」

「うむ……ウィリアムズです」

《ウィリアムズ提督、久しぶりだな》

「マクモリス本部長こそ。今日はどのような用件で？」

《いやなに、ちょっと移動してもらっただけだ。パールハーバーにな》

「なるほど、そういうことですか」

《出港の用意はできてるか？》

「それがあと2日ほど掛かりそうですね。戦艦の16インチ砲弾の積み込みに時間を要しております」

《それは仕方ないだろうな。慎重にやってくれ》

「慎重にやらせます」

8月22日

ミッドウェー島西方

350 km

潜水艦ガードフィッシュ

「艦長、コーヒーでもどうです？」

「いや、俺は緑茶にしておくよ」

ガードフィッシュ艦長のマクガイア中佐は、発令所の赤い照明の下で苦笑いを浮かべながら言った。

「玉露入りですか？ 艦長もお好きですな」

「君らは知ってたか？ 眠気覚ましにも効果があることを」

「それは知りませんでした。やはり日本に行った経験からです」

か？」

「あの国の海軍軍人は将官から兵卒まで緑茶を飲むという」

「いくらなんでもそれは大げさでは？」

「やはりそう思うか。ジャパニーズジョークというやつさ」

その言葉に発令所は笑いに包まれる。午前1時……普通の人間なら寝静まっている頃だ。

ソナーマンのスミス中尉はそんな中でも外部からの音に注意を向けていた。そこである不審な音が発生していることに気づく。

「これは……船首が波を切る音か！」

しかし本来なら聴こえるはずの機関音がない。そのことが余計に不審さを助長する。

「艦長、不審な音を探知しました。潜望鏡深度まで浮上してください」

「どうしたんだ？ 中国やロシアの軍艦でも現れたか？」

「いえ……波切り音は聴こえるのですが、機関の発する音が聞こえないのです」

「こんな時間にこんな場所でボートを漕いでる奴は誰だ？ 仕方ない、潜望鏡深度まで浮上！」

冗談を言いながらも艦長は浮上を命ずる。

やがて潜望鏡深度に達したガードフィッシュは停止し、マクガイアは潜望鏡越しに海上を睨み付ける。

「いつたい何者だ？　おつ、いたいた。だがなんだあれは？」

「艦長、何かあつたんですか？」

「副長、自分の目で見て君の感想を聞かせてくれ」

「は、はあ。見てみましょう」

副長のモーガン大尉は潜望鏡を覗く……

「なっ、あれはなんです！？」

「誰か本土に映画の撮影でもやってるのかって聞いてくれ」

「艦長、今時あんな船を使う国はありません。あれは映画の撮影で間違いないのでは？」

「いや、とにかく太平洋艦隊司令部に連絡しろ。映画の撮影をこんな場所でやると思つか？　あれは不審船だ」

「アイサー！」

「大型の木造帆船で大昔の戦列艦みたいな船と報告しろ」

タルガロス王国戦列艦フランス

フランスは120門級戦列艦として建造され、全長64m、排水量4000tを誇る大型戦列艦だ。

「提督、どうも星の様子がおかしいようです」

「おかしいとは？　　どうおかしいんだ」

セルト提督はそう言っていると夜空を見上げ、そこで輝く星を確かめる。

「うむ……出港したときと明らかに違うな。数時間でこれほど変わるとは思えん」

「提督、ここは一旦停止して夜明けに様子を見たほうが良いかと」

「しかし、我々は交渉団を乗せてるんだ。早く送り届けねばならん」

「ではこのまま東へ進みましょう。あと一晩あれば着くはずですよ」

パールハーバー

太平洋艦隊司令部

「謎の木造帆船は進路を維持、速力10ktで航行中です」

「このままだとミッドウェー島に明日の朝までには到達するでしょう」

「あの島は現在無人だったな。だが放っておくこともできん」

「しばらく放っておいて構わん。それより、TF31は今どこだ？」

「あと2時間ほどで到着するはずです」

「そうか。TF31に……いや、モンタナには不審船の監視についてもらおう。連絡を頼む」

「イエスサー」

アメリカ合衆国領海

TF31

戦艦モンタナ

「司令、太平洋艦隊司令部より通達。モンタナはミッドウェー近海に進出し不審船の監視にあたれ。以上です」

「不審船か。しかしこんな巨艦で監視とは何を考えてるんだ？」
司令部からの通達に、マーク・ウィリアムズ中將は怪訝な表情を浮かべる。

現在、第3艦隊司令部は旗艦のモンタナに座乗しており、それ

は不審船の監視に司令部が赴くことを意味していた。

「まあいいか。艦長、そういうことだから頼んだ」

「アイサー！　ところで司令、不審船が木造帆船だと聞いたのですが。どこの国なんでしょう？」

「ガードフィッシュが追尾してるようだが、見たこともない国旗を掲げているようだな」

「不思議なことですね。もしかしたら異世界の船とか……」

「そうかもしれんぞ。日本が消えたのは異世界に飛ばされたと考えてもいいからな。その逆のことがあってもいいはずだ」

「ロマンチックですな。これだから海の男はやめられない」

「艦長、君はインペリアルジャパニーズネイビーのほうが似合ってるんじゃないか？」

「それは嬉しいですな。アドミラル東郷やアドミラル山本は私の崇拜する偉大な提督です」

「アドミラル小沢も忘れちゃならん。彼こそ太平洋戦争一番の功労者に違いない」

「それは間違いないです。我が合衆国海軍も、ハルゼー、スプルーアンス、ミッチャー、ニミッツ……他にも優秀な提督がたくさんいます」

「最近じゃ作戦本部長のマクモリス大将か？　湾岸戦争の英雄だ」

「間違いないでしょう。司令もあと何年後かには英雄ではないですか？」

「わしはそういう柄じゃない」

その一言で艦橋内は笑いに包まれた。

8月26日

10時25分

ミッドウエー近海

戦列艦フランスは島の見える海上で停泊していた。それはタルガロス王国に程近い場所にあるはずの大陸国家バーガリアン帝国が見当たらず、目の前にある小さな島に戸惑っていたからだ。

「提督、やはり王国へ引き返しましょう。明らかにおかしい…あんな島はなかったはずです」

「そうだな。ここでじっとしてても意味がないしな」

「提督！　水平線に島のようなものが！」

「島のようなものだと？　なんだそれは。もっと具体的に…」

セルトは乗組員を叱責しながら自らの望遠鏡でその方向を見つめる。そして見えたものに絶句した。

「あれは島じゃない！　　船だ……それも恐ろしく速い！
いや、なんて大きさだ」

それはここからでも大きく見える、なにかとてつもなく巨大な存在感が確実に近づいていた。

「近づいてくる……！」

やがて形もハッキリと分かる距離にまで接近してきた巨大な何かは、船だった。船の形をした巨大な「何か」と言ったほうがいいだろうか、圧倒的な存在感を誇示するかのようにゆっくりと迫ってくる。

「提督！　　あれはなんですか！？」　　あんな船、バーガリアン帝国ですら持ってないですよ」

「とんでもない奴が来やがった」

「マストらしき場所に国旗が！　　見たことのない旗です」

「それより、あの大砲をしてみる。化け物だぜ」

「だが砲門数ならこっちが勝ってる」

「馬鹿野郎、あれに通用すると思うか？」

謎の巨大船はフランスと対向するかたちで接近してくる……距

離は徐々に縮まっていき、やがて右舷50メートルほどを通過する。

全長は果てしなく長く、中央付近には巨大な塔、もはや化け物
としか言えない巨大な大砲……

向こうの乗組員の顔まで見える至近距離、フランスの乗組員た
ちは皆一様に驚愕の表情を浮かべていた。

「巨大船遠ざかります」

「あれはいつたいなんなんだ！」

「もしかすると我々は未知の国に行き着いてしまったのでは？」

「とりあえず、彼らと接触できないだろうか？」

「提督、我々は彼らの領海を侵している可能性が高いです。攻
撃されてもおかしくありません。あの船は帆もなしにとつもない
高速で動いています……それにあの巨大な大砲は一発でも被弾すれ
ば、このフランスは粉々に吹き飛ぶでしょう」

ドオオン……

「なんだ!？」

「提督! あの大船が発砲!」

「なんとという轟音!」

その後、水面に着弾した砲弾による巨大な水柱は、その破壊力
をひしひしと感じさせる。

「白旗を掲げろ！」

「まだ威嚇だけだ」

番外編――帝国の消えた世界――（後書き）

次回へ続く……

閑話休題

2014年8月

大日本帝国

帝都東京

「まさか！　こんなもの認められるはずがない！」

海軍大臣の長井は書類をテーブルに思いきり叩きつけた。

「馬鹿げてる！　こんな……105000tの新型戦艦だと
！？　冗談はほどにしてくれ」

「来年度の海軍補充計画はとんでもない案だな」

2015年度海軍補充計画……戦艦大和の代艦として、51cm砲を12門装備する紀伊型戦艦を建造するというとんでもない計画である。

紀伊型要目（計画）

基準排水量：10万5千t

満載排水量：12万4千t

全長：330m

全幅：45m

吃水：12m

機関：艦本式ディーゼル

4基4軸28万馬力

速力：28kt

武装：50口径51cm

3連装4基

60口径10cm砲単装6基

14式垂直発射器64セル

20mm高性能機関砲4基

艦政本部の暴走によつて設計された現代の戦艦……彼らの言い分は、この世界における圧倒的な力の誇示、大艦巨砲主義を貫けばミサイルなど高価な兵器を使わず、予算の削減が可能。

だが現実には大和以上に維持費が掛かるということは想像に難しくなかった。

「こんなもの造つて力の誇示？ 遂に頭のネジがぶつ飛んだか！」

「大艦巨砲主義はもはや半世紀以上も前のこと。それなら空母を建造すべきだ」

「まず……これで予算は承認されるのか？」

「とりあえず案として出してみよう」

1ヶ月後、とんでもない海軍補充計画案の予算獲得に成功してしまう。海軍関係者は驚きを隠せなかったという……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7802m/>

異界の帝国

2011年9月27日22時29分発行